JICA 海外協力隊向け実践ガイド［CROSSROADS］

クロスロード

JUNE
2022
6

特 集

再派遣から任期終了まで

コロナ禍のハンデを乗り越えた先輩隊員

クロスロード

2022 JUNE

Contents

表紙によせて

パラグアイの首都・アスンシオンには、日本の無償資金協力によって建てられた施設があり、そこの体操教室で、強化選手が参加する大会に向けて練習に取り組む選手のサポートをしました。個人種目が多い体操競技ですが、それぞれの選手と目標に向けて一緒に練習に取り組むことで、絆を深めることができました。澤田和哉さん（パラグアイ／体操競技／2014年度1次隊・埼玉県出身）

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集

5 再派遣から任期終了まで
コロナ禍のハンデを乗り越えた先輩隊員

14 派遣国の横顔 パラオ
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

20 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

22 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

24 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり＆アクティビティ

26 先輩隊員のシューカツ記

28 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

30 待ってます、あなたを！ ～各界からのエール

31 あの日、地球の、あの場所で。

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし

36 ウチのこだわり —OB・OGショップ 海外編

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

■国別索引

	掲載ページ
インドネシア	22、31
エジプト	28
ガーナ	10、21
カンボジア	26
ケニア	34
コロンビア	22
ソロモン	2
中華人民共和国	8
ドミニカ共和国	12
トンガ	4
パラオ	15、16、17、18
パラグアイ	1
ベナン	24、36
マーシャル	17
ルワンダ	6

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	6
村落開発普及員	21
野菜栽培	22
青少年活動	2、28、31、36
陸上競技	18
体操競技	1
PCインストラクター	12
日本語教育	8
数学教育	17
体育	26
小学校教育	24
小学校教諭	15、16
家政・生活改善	4
栄養士	34
学校保健	10

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
青森県	22
茨城県	21
栃木県	31
群馬県	22
埼玉県	1
東京都	12、26
神奈川県	28、36
愛知県	4、18
滋賀県	10
京都府	2
大阪府	24
福岡県	6、34
大分県	8、15、17
沖縄県	16

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

最初は生徒たちに列になって並んでもらうのにも苦労した。「でも、それは日本だけの文化だと気づき、手をつないでもらうなど臨機応変に対応しました」という田中さん

子どもたちに伝えたいSDGs
世界の学校

透明な海に囲まれたソロモンの学校で体育を通して体を動かす楽しさを伝えました

田中美那（たなかみな）さん（ソロモン／青少年活動／2017年度1次隊・京都府出身）

南太平洋の群島国・ソロモン諸島。首都のあるガダルカナル島は第2次世界大戦の戦地として知られています。私が赴任したのはウエスタン州の島にあるノロという町で、ソロモン第2の国際港がある人口約5千人の町でした。

町内の幼稚園、小学校、中学校、高校を回って、体育の指導や、地域のスポーツ振興を行いました。ソロモンの学校には体育の教科がなく、教員も体育の授業を受けたことがありません。週に1度スポーツデーがありましたが、希望者が放課後にサッカーやバレーをするといった内容でした。これではみんなが体を動かす機会にならないと思い、時間割に体育を加えてもらえるよう、各校に働きかけました。体育の授業では全員が体を動かし、見ているだけの人が出ないよう、かけっこを中心に行っていったところ、授業を心待ちにしてくれる子も次第に増えていきました。

小学校から高校まで、授業は朝8時の集会から始まり、12～13時半頃まで行われます。高温多湿な気候のため、体育の授業は朝一番の早い時間帯に行うのが理想的だと感じました。昼食を取る習慣がないので10時半から30分間のブレークタイムに、持参したり学校のなかで売られているお菓子などを食べていました。

海では、子どもたちが銛（もり）で簡単そうに魚を捕っていました。魚介類に恵まれた環境でも、魚を生食する習慣はありません。電気が通っていない家もあり、冷蔵庫のある家庭が少なかったからだと思います。普及していたのがツナの缶詰で、日本の会社が1970年代に現地で生産を始めました。ある日の授業中、生徒たちに前日の夕食を聞いたら全員が「ツナ缶」と答えたこともありました。国民食ともいえる食品で、そのことからも親日感情を持っているように思います。

Text＝村重真紀　写真提供＝田中美那さん

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from Japan

トンガの人たちからもらった恩を次の人に回し 出会った人たちに直接的に貢献したい

玉腰（たまこし） 純（じゅん）さん（トンガ／家政・生活改善／2014年度9次隊・愛知県出身）

サッポロビールが一般消費者とビールを造るプロジェクトに私が企画したプランが採用され、期間限定で商品化されました。応募したのは、ビール好きであったことはもちろんですが、コロナ禍で閉塞（へいそく）感があり、「トンガの人たちの考え方が日本にも広がればいいな」という思いがあったからです。

学生時代に参加した協力隊の短期派遣先がトンガでした。トンガにはシェアの文化があり、食事をする際はたいてい「これを食べなよ」と自分の分を分けてくれて、困ったときには力を貸してくれました。他者を思いやる精神があるように感じました。助けてほしいと訴えなくても、気にかけ、助けてくれる。私はこうしたトンガの人たちの考え方や生き方に大きな影響を受けました。

2020年の夏からビール造りが始まりました。トンガを知ってもらうのにどんな表現ができるか考え、一つはトンガでポピュラーなココナッツを原料の一部に使って、味で伝えることにしました。もう一つは、「O'faatu（オファ アトウ）」というトンガの人たちが恋人同士や親しい人に使う「愛を込めて」という意味の言葉を伝えたいと思い、パッケージデザインに加えてもらいました。派遣中に落ち込んでいるとき、みんなから「O'faatu」と声をかけてもらい、「ここにいていいんだ」と心の支えになった、私にとって特別な言葉だからです。

22年1月にトンガ沖で大規模噴火と津波が発災し、あぜんとしました。開発したビールが完成して販売を開始する直前のことで、「トンガのために何かできることがないか」とメーカーと話し合って5月末までの売り上げの一部を義援金としてトンガ王国政府に寄付することが決まりました。

トンガの人たちからもらった恩をほかの人たちに回していく「恩回し」をしたいと思っています。今回のビール造りはその一つです。このほか、私が協力隊で経験したことを中高生に伝えるワークショップも行いました。トンガOGにイラストを描いてもらい、トンガへのチャリティTシャツの企画・販売もしています。

トンガの精神を知ったからこそ、「出会った人たちに直接的に貢献したい」と思うようになり、帰国後にいろいろなことにチャレンジしてきました。今は人の健康と笑顔に関わる生き方を目指し、養護教諭になるために仕事をしながら通信大学で教員免許を取得中です。悩みを抱える子どもたちの支えになりたいと考えています。

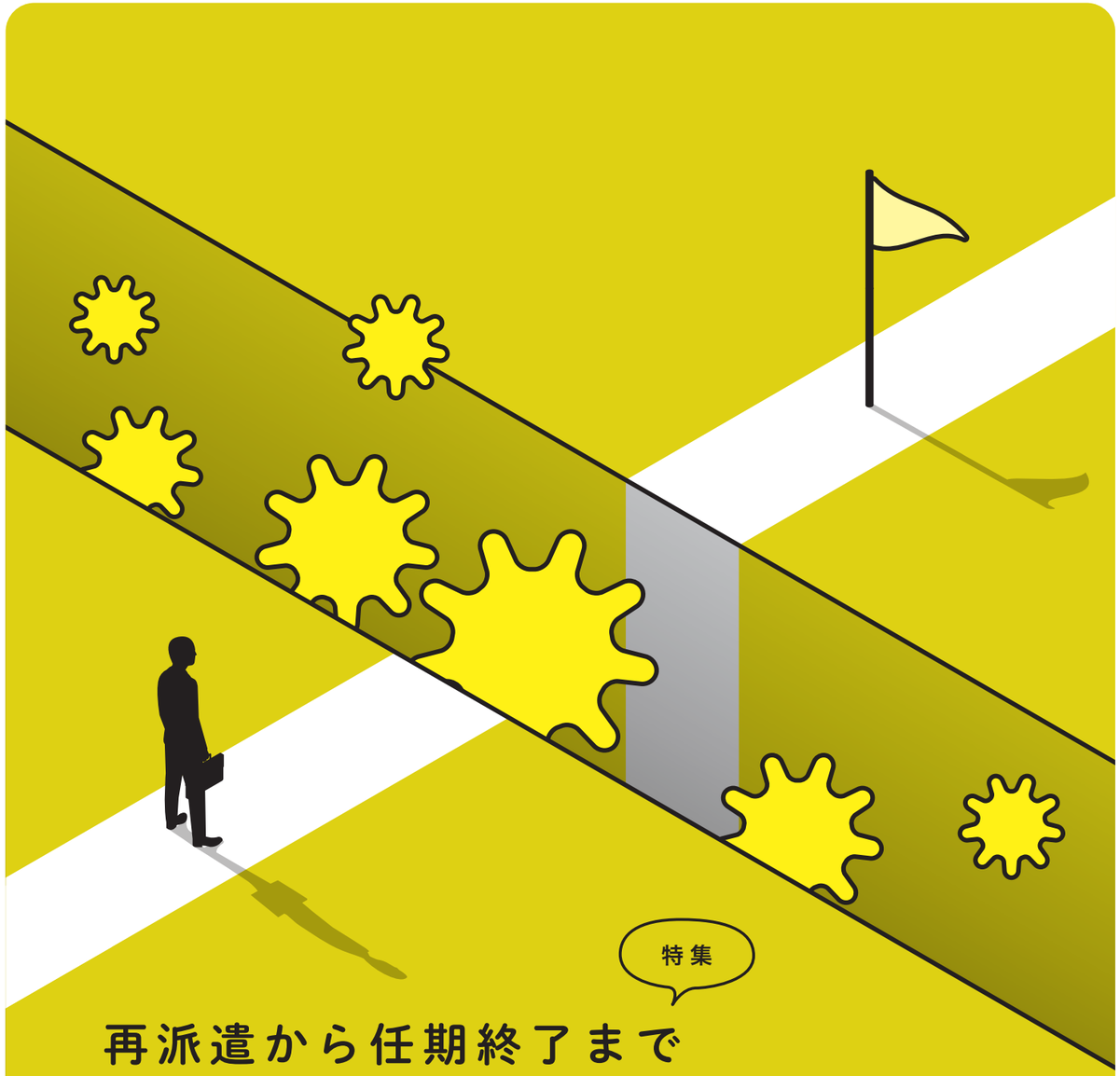
1 玉腰さんの「人生ストーリー」をテーマに造られた発泡酒「トンガってる？」。その名には逆説的に「そんなに気負わなくても大丈夫だよ」という意味が込められている。販売は在庫がなくなりしだい終了、5月末までの売り上げの一部が義援金になった

2 駐日トンガ王国大使（写真中央）に寄付の申し入れを行った

3 玉腰さんはトンガの魅力を伝えるさまざまなイベントを立ち上げてきた。写真はトンガの伝統料理を楽しむ企画

4 同僚とココナッツ搾り。大学連携案件でトンガに赴任した玉腰さんは、現地の肥満の課題に対し、クッキング・デモンストレーション、栄養・健康知識の提供により健康への関心を高める活動に携わった

Text＝久保田裕之　写真提供＝玉腰純さん／サッポロビール



特集

再派遣から任期終了まで コロナ禍のハンデを乗り越えた先輩隊員

2020年3月、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、JICA海外協力隊の全隊員が一時帰国してから2年が過ぎた。待機を選んだ隊員たちは、同期隊員が減っていき、先行きが見えないなか、日本でどのようにモチベーションを維持しながら過ごしたのか。晴れて再赴任を果たしたあとは、先輩隊員がいないなかで、短期間でも成果を残すためにどのように活動を行ったのか。帰国したばかりの4人の隊員にお話しいただいた。

Text＝秋山真由美（P6-9）、大宮冬洋（P10-13）、ホシカワミナコ（本誌 P5）
Photo（小柳さんプロフィール）＝ホシカワミナコ（本誌）　写真提供＝ご協力いただいた各位

上：日本の子どもたちからの寄付で購入したクレヨンなどを進呈　右：寄付で買ったクレヨンと画用紙に、将来の夢などを描いたルワンダの子どもたち
小柳さんは「Draw Dreams」のホームページを開設して絵を販売、売上金はすべてルワンダの学校へ送っている
https://drawdreams.net/?lang=ja

CASE 1

再赴任したら、要請内容が解決済みに新たな課題を見つけ、挑戦した

小柳耕平さん（ルワンダ／コミュニティ開発／2019年度2次隊・福岡県出身）

どんなときもやれることを探す ビジョンを示せば道は開ける

「困難が起きたら引き揚げる。そんなふうには思われたくありませんでした」。2020年2月11日にルワンダ東部県キレヘ郡ガトレセクター事務所に赴任して1カ月余り。突然の帰国命令を受けたときのことを小柳さんはそう振り返った。3月18日に帰国通達のメールを受け取り、2日後にはぎゅうぎゅう詰めの飛行機に乗っていた。ルワンダが国境封鎖した日と重なり、一日でも遅れていたら帰国できなかったはずだ。

「ルワンダ虐殺のとき、国境なき医師団と赤十字を除く国際支援団体が軒並み撤退したと聞きました。自分も新型コロナで任地の人たちを見捨てて帰ってしまったような後ろめたさが残りました」

横浜での2週間の健康観察期間中、一斉帰国した隊員たちが再会を喜び合うなか、小柳さんはすぐにオンラインで仕事探しを始めた。

「渡航準備にもお金がかかっていますし、日本にいるだけでも生活費はかかりますから」

いつ再赴任が決まるかわからないため、仕事は短期のアルバイトに限った。渡航前に部屋を引き払っていたが、「親に合わせる顔がない」と実家には帰らず、京都の知人宅に住まわせてもらった。1カ月、2カ月と、待機期間が長くなればなるほど、「生活の不安、焦り、いろんな思いが押し寄せてきました」。

21年4月2日に再赴任できた際は「これでやっと成果が残せると、ほっとした」という。しかし、約1年の待機期間を経て任地に戻ってみると、状況は劇的に変わっていた。任地は農村地帯で水道が整備されておらず、住民はハンドポンプで水をくみ上げている。そのハンドポンプも適切に管理されず、故障するとそのまま放置されてしまうため、本来の要請内容は、「水の防衛隊」として、自律的に水を管理する組合を組織化することだった。

「ところが、一時帰国中に3基のハンドポンプのうち、2基が太陽光パネルを使った最新のポンプシステムに替わっていたのです。残りの1基は壊れたままでしたが、半年かけて近隣を調査したところ、修理どころか、そもそも必要のないハンドポンプだということがわかりました」

小柳さんの一時帰国中に、太陽光のポンプシステムを設置したのはルワンダのベンチャー企業だった。現地の課題をルワンダの企業や住民自身が解決する姿を目の当たりにし、感動すると同時に、自分のやることがなくなってしまった事実にがくぜんとした。

一筋の光が差したのは、VC（企画調査員（ボランティア事業））からの相談がきっかけだった。日本の小学校から「ルワンダの小学校の水事情を紹介してほしい」という依頼があったという。そこで小柳さんは、オンラインビデオツアーを開催し、スマホをビデオカメラ代わりにして村や子どもたちの様子を実況中継した。その後、個人的つながりからビデオツアーを行う日本の学校を増やしていき、児童や先生の反応を見て手応えを感じていると、そのうちの1校の児童たちから募金で集めた3万円を寄付したいと申し出があった。ルワンダの子どもたちが10～20kgもある水タンクを頭に乗せて歩く姿を見て、クラスで話し合い、自主的に支援したいと考えたのだ。

小柳さんは「お金を渡しても親が靴やビールを買ってしまうかもしれない。根本的な問題解決にはならない」と支援を申し出た児童たちに問いかけた。結果、紙とクレヨンを買って、子どもたちに将来の夢を絵に描いてもらい、それを売ることになった。絵が売れれば、3万円がもっと大きなお金になり、自分たちの問題を自分たちで解決することにつながるのではないか。そんな思いでスタートしたのが、「Draw Dreams（夢を描く）」プロジェクトだ。

自費で通訳を雇い、村人たちとコミュニケーションをした小柳さん。最初はノートやペンなどの実用品がほしいと反対していた人たちも、ビジョンが伝わると、「やろう！やろう！」と快く協力してくれ、最終的に、公立小学校8校の児童約800人が、自分の将来の夢や、現在の水や生活の問題についての絵を描いた。

小柳さんは絵と児童一人ひとりの写真を撮り、4カ国語のウェブサイトを作成した。それがSNSで拡散されると、たちまち多くの反響が寄せられた。日本の児童たちから届いた3万円は、ルワンダの子どもたちが絵を描くことで10万円にまで増えた。

22年1月に任期を終え、日本に帰国した小柳さんのもとには、「10万円で制服を買い、休学していた子どもたち約80名を復学させることができた」と報告があった。「制服がないということはお金がないということ。その事実を恥ずかしく感じ、学校に行きたくなくなる児童もいます。そうした児童を減らそうと、先生たちが話し合い、より困っている人たちのために使ってくれたことがすごく嬉しかった」。

再赴任直後は、コロナで人々との交流が制限され、やるべきことを見失い、同期や先輩隊員もいないなか、「孤独感があった」という小柳さん。それでも、実績を残すことができたのは、状況やニーズが変化しても、自分にできることを探し、行動することを諦めなかったからだ。

「焦らずに周囲の人と積極的に話してみて、要請内容以外のことでも、やってみる。アプローチを変えると、見えてくるものがあると実感しました」

児童たちには、コロナウイルス対策のポスターも描いてもらった。展示を見た大人がディスカッションしだしたりするなど、大人の衛生教育にもなった

小柳さんの活動期間と気持ちの変化

2020年1月6日派遣国到着。40日間、キニヤルワンダの語学訓練とルワンダ人家庭でのホームステイ生活。

2020年2月11日、配属先であるガトレセクター事務所に赴任。

「同僚はみな忙しく、現地の人たちとはほとんどコミュニケーションが取れていませんでした」

2020年3月20日に新型コロナウイルス感染拡大のため緊急帰国。

「見捨てて帰ると思われるのは嫌でした。でも、同僚も1カ月しかいない僕に思い入れはなかったと思います。それも寂しかったですね」

「待機」を選び、日本でWebサイトの翻訳、地元より仕事の多い京都で遺跡発掘作業、治験などの短期アルバイトをして糊口（ここう）を凌（しの）いだ。

「労力、時間、お金を注ぎ込んで、このまま終わったら人生どうなるのかという不安をずっと抱えながらも、いつでも再赴任できるように短期の仕事でつなぎました」

2021年4月2日に再赴任。

「戻ったらみんな何も気にせずウェルカムな雰囲気だったのが嬉しかったです。一番つらかったのは、他の隊員とも交流できず、何をしたらいいかわからなくなったことですね」

2022年1月に任期終了。

「残りの期間で何ができるのか、焦りもありましたが、タイムリミットを意識できたのはラッキーだったかもしれません。とにかくできることをやるしかありませんでした」

後輩隊員へのメッセージ

状況やニーズは変わっていきます。目的を達成するためのアプローチは一つではなく、いくつもあるはずなのでいろいろ試してみてください。困ったときはまずリラックス。戸惑ったとき、怒ったときは呼吸が乱れ、相手にもそれが伝わります。落ち着いて周りが見えてきたら、回り道も見えてきます。相手を信頼して助けを求めましょう。

PROFILE

こやなぎ・こうへい ● 学生時代はバックパッカーとして世界を放浪。京都の大学を卒業後、インドの民間企業勤務などを経て、国際NGOに参加し、パレスチナ・ガザ地区にて人道支援に携わる。よりダイレクトな支援をするために協力隊に参加。2022年3月より外資系旅行会社に勤務。

右：作文授業風景。同僚教員からも頼りにされた
上：手作りのおみくじ。割り箸をおみくじの棒にし、チョコレート菓子の六角形の箱に画用紙を張って、おみくじを入れる箱を作った

CASE 2

一時帰国中も授業のネタを収集、再派遣後すぐに稼働できる状態に

八丁文子さん（中華人民共和国／日本語教育／2019年度2次隊・大分県出身）

任務を全うするため焦らずに、好機を待つ

「自分では行けない場所で生活してみたかった」という八丁文子さん。大学で日本語教育を専攻し、これまでに日本語教師をはじめ、さまざまな仕事に従事しながら、中国、ニュージーランド、オーストラリアなどの国で生活してきた。実は、協力隊の応募は2度目。大学4年生のときに空手の指導で応募したが不合格だったという。

20年近くを経て再挑戦。2019年11月、日本語教師として着任したのは中国南西部・貴州省凱里市の全寮制高校だ。約4000人の生徒の8割近くがミャオ族やトン族などの少数民族で、外国人を見たことがないという生徒も多い。

初の外国人教師として、同僚や生徒たちから歓迎されたのもつかの間、赴任して約1カ月半後、新型コロナウイルス感染拡大による退避勧告が出された。高校は春節休み中で、遊びに行っていた同期隊員の家で連絡を受けた八丁さんは、スーツケース半分ほどの荷物を持って、いったん北京に退避した。

手作りのふくわらい。鬼やおたふく、人気アニメキャラクターの顔などで作った

「同僚の先生に『いったん帰ることになった、ごめんね』という連絡だけしました。凱里市には感染者がいなくて、そのときはお互いすぐ戻れるだろうと思っていたのです。それが、世界中の隊員が帰国することになって、だんだんとこれはすぐに戻れないかもという雰囲気になりました」

日本に一時帰国してからは、大分県にある実家に戻り、外国にルーツを持つ人たちの面接の通訳や子どもたちの学習支援のボランティアをして過ごした。再赴任後の授業で使えるようにと、お正月飾りやどんど焼き、春の桜、夏の七夕など、日本文化がわかるような写真や動画も撮りためた。

「焦りはなかった」と当時を振り返る八丁さんだったが、半年以上経過すると、日本で就職したほうがいいのではという思いがよぎるようになった。面接の通訳を手伝った学校からは、正式に働いてほしいと声がかかった。「再赴任したいけれど、地元で希望の職に就けるチャンスは少ない。再赴任するか迷っているとVCに伝えました」。

迷っていたのにはもう一つ理由がある。35年間続いた日本の対中政府開発援助（ODA）が22年3月で終了し、協力隊の派遣もこれで最後となるからだ。待機を選んでもこのまま活動終了となる可能性もある。

「後悔したくないからぎりぎりまで再赴任のチャンスを待つことにしましたが、もっと遅くなっていたら諦めていたかもしれない。それはもうタイミングや運としか言いようがないですね」

結局、再派遣が決まったのは20年12月。大連で3週間、貴州で1週間の隔離期間を経て、21年1月に赴任先に戻ることができた。

過酷な受験戦争で知られる中国の日本語入試問題では、文法や読解のみならず、日本の文化や常識についても問われる。再赴任後の八丁さんは生徒たちから知りたいことや興味があることを聞き、授業に生かした。

ほかに、初の試みとして、動画のやりとりで日本の公立小学校と交流を図った。オンライン環境が整っていなかったため、リアルタイムではなく、生徒たちの学生生活をスマホで撮影し、パソコンで編集したものを日本に送った。「動画編集は初めてでしたが、同期隊員にやり方を教えてもらって挑戦しました」。

ほかの先生が受け持っていた生徒の作文を添削したことがきっかけで、途中から作文の授業も追加された。

「添削したものを授業でフィードバックしたら喜ばれて、『継続してほしい』と頼まれたのです。受験対策を踏まえた授業にするため、中国の大学入試要項も全部調べました」

一方、授業とは別に、大多数を占める英語クラスの生徒を対象にした「日本語クラブ」を発足させた。交流しながら日本文化への興味が深められるよう、日本のアニメのセリフを文字起こししてアテレコしたり、食堂を借りて白玉だんごを作ったりして楽しんだ。

「初めからあれもこれもやりたいと意気込んでも現地の先生たちは困惑しますよね。授業を見て、認めてもらったうえで、『これもお願い』と任せてもらえたのはよかったと思います」

本来の任期は21年11月末までだが、八丁さんは22年1月の春節に入るまで活動。コアラの形をしたチョコレート菓子が入っていた六角形の空き箱と割り箸で作った「おみくじ」、同期隊員と共作した「五十音かるた」、日本文化の紹介動画など、授業で使った教材や動画、そして中国の生徒のために日本の小学生が作ったお守り、すべてを託して日本に帰国した。

この春からはずっと待ち続けてくれた地元の学校で働く八丁さん。中国の同僚からは、日本語クラブの継続が決まったという嬉しい知らせも届いた。何事にもポジティブな姿勢で取り組んできたからこその結果に違いない。

「ポジティブというより諦めと受け入れだと思います。やりたくてもやれなかったこともありましたが、それも相手の考えや事情があってのこと。今回、中国の人たちと出会い、いろんな考えを知り、相互理解について一層考えるようになりました。大切なのは相手を理解しようとする気持ち。これからも日本語教師として、『この人なら理解してくれる』と思ってもらえるような存在になれたらと思います」

八丁さんの活動期間と気持ちの変化

2019年11月29日派遣国到着。中国語が話せたため、北京での語学訓練は約2週間で終了。

「ただ、凱里市はなまりのある人が多く、最初の頃は年配の先生が何を話しているかわかりませんでした」

2019年12月13日から任地へ。1カ月半ほどで春節のため学校が春休みに。

「生徒にはリラックスして日本語の楽しさを知ってもらおうと思いました」

2020年1月29日に新型コロナウイルス感染拡大のため緊急帰国。

「GWくらいには戻れるだろうと思っていました」

「待機」を選び、外国にルーツを持つ子どもたちの面接の通訳や学習支援ボランティアなどをしながら再赴任の決定を待った。

「夏以降は日本で働くことも視野に入れ始め、ぎりぎりまで悩みました」

2020年12月23日から1カ月の隔離生活を経て、2021年1月21日に再赴任。当初は11月末までの任期だったが、2022年1月の春節に入るまで活動し、任期終了。

後輩隊員へのメッセージ

どんなときも焦らないこと。焦ったり、気負いすぎたりすると自分が苦しくなるだけです。日本語教師は自分が持っているものしか学生に提供できないので、今までの経験や価値観に固執せず、できるだけいろいろな経験を積んだり、授業の準備をしたりしておくといいと思います。たとえ現地で使えなくてもいつか役に立つはずです。

PROFILE

はっちょう・ふみこ ● 琉球大学で日本語教育を専攻。卒業後、約5年間中国で生活する。ワーキング・ホリデーでニュージーランド、オーストラリア滞在、小学校の日本語指導員などを経験。大学院で修士号を取得したのち、協力隊に参加。2022年4月より大分県で日本語教師として勤務。

右：学校を巡回し、児童たちに月経衛生などの保健指導を行った。「現地教員が教えたほうが子どもたちは内容を理解しやすいうえ、教員にとっても学びになるので、私はフォローに回りました」　上：ヒルダさんが行いたいと言ったSHEP担当教員の研修を実現

CASE 3

待機期間中に「相手がやりたいこと」をサポートする重要性を実感

小池木之美さん（ガーナ／学校保健／2019年度2次隊・滋賀県出身）

待機中のコロナ医療従事「支援される側」になった

現在は大阪府内の医療系ベンチャー企業で働く看護師の小池木之美さん。JICA海外協力隊の赴任地はガーナ共和国。子どもたちが通う学校の保健衛生状況を改善するのが任務だった。

「災害や紛争が起きたときに医療支援に行く国際援助団体はたくさんあります。でも、単発のプロジェクトを短期的に実施することがほとんどです。私はもう少し長期的に、現地の人たちと一緒に生活をしながら予防医療をやりたいと思っていました。協力隊の2年間がちょうどよかったのです」

ガーナに着任したのは2020年1月。小池さんの場合、語学研修をしつつ、3週間のホームステイを経験した。ステイ先はカウンターパートであるヒルダさんの自宅だった。

ガーナでは、政府が各援助機関と連携して「SHEP（※1）」と略される学校保健教育プログラムを実施している。各学校の教員1名はSHEPコーディネーターを兼務。若い女性に必要な栄養素である葉酸を児童に飲ませるプロジェクトなど、援助団体のプロジェクトの担当窓口や学校内の衛生管理などを務めている。

「日本の学校のように保健室の先生はいません。SHEPコーディネーターは普通の先生たちなので、学校保健の知識や意欲にはバラつきがあります。教育委員会のヒルダさんはSHEPコーディネーターを束ねる立場でした」

各学校には保健室どころか救急箱もなく、水道が通っていない所も多いので手洗い場もない。トイレは囲いや溝があるだけ。衛生状況を改善するためにはどこから手をつけたらいいのか。小池さんは悩むよりも行動に移した。

「先輩隊員が活動する場所にモデルとなる学校がありました。そこを見学させてもらい、ティッピータップ（※2）ならすぐにできると気づいたんです。大きな収穫でした」

小池さんはヒルダさんに活動計画を興奮気味に提案、賛同を得た。しかし、直後に帰国することになった。

「忘れもしない3月21日。2年間は日本に戻らないつもりだったのでショックでした」

ただし、現地の生活環境が急速に悪化していたのは事実だ。小池さんは当時を振り返る。

「私が住んでいた地域にはアジア人女性は私一人。街中では『コロナウイルス！ゴーホーム』と言われたり、バスの乗車拒否をされたりしました。2カ月間では人間関係も築けていません。そんな状況でアジアヘイトの雰囲気が高まっていました。もちろん、私を守ってくれるガーナ人たちもいましたが、あのまま居続けていたらガーナを嫌いになっていたかもしれません」

日本での活動から。新型コロナ軽症者宿泊療養施設で準備していた医療機器類

しかし、日本での待機期間には、嫌な体験を思い出す間もない日々が待っていた。滋賀県が設置した新型コロナ軽症者宿泊療養施設での勤務が始まったのだ。「元々、災害援助にも興味があって看護師になったので、何か手伝えることがあるのが嬉しかったです」。

小池さんは施設に住み込んで働き始めた。療養者の状態チェック、ストレス解消のための散歩コースの設置、お弁当などを届ける職員の感染症対策と、すべきことはいくらでもあった。医療者が足りなかったため、短期交代で病院から医療チームが派遣されてくる。このとき小池さんは「支援される側」を体験した。

「多くの医療チームが来てくれました。現場にとってありがたいチームもあれば、緊急性の低い仕事を増やしていったチームもあった。現場は確かにあらだらけです。でも、まずは私たちが何に困っているかを聞いて、手助けしてくれるチームがいいと感じました」

支援される側の本音とニーズを聞き出すことの大切さ。小池さんはガーナのヒルダさんに「やりたいこと」ばかりを言っていた自分を思い出した。そうじゃない。母親のような年齢の彼女が困っていること、こちらにやってほしいことを聞くべきだったのだ。

ガーナに再赴任した小池さん。ヒルダさんの要望をすべて書き出してもらって、それをもとにSHEPコーディネーターに聞き取りを行った。そして彼らを集めた研修の開催にたどり着いた。

「今までは管轄の158校を巡回していました。そもそものSHEPとしての役割を理解していないSHEPコーディネーターもたくさんいて、研修が必要だと考え、それがヒルダさんの希望でもありました。研修を開催することで、先生同士のつながり、保健センター職員と先生のつながりをつくる場にできるかもしれないと思いました」

小池さんによれば、ガーナ人はディスカッション好き。研修のグループワークでは活発な意見交換が行われた。地域によっては葉酸サプリを飲むと不妊になるという迷信もある。児童の親に説明しても、「あなたは学校の先生。医者じゃないでしょう」と言われてしまう。SHEPコーディネーターが窮状を明かすと、「いつでもオレたちを呼んでくれ」と保健センターの職員が応えた。学校と保健センターが現場レベルでつながったのだ。

「私は場を設けただけです。でも、いい場になったと思います」

失意でしかなかった一時帰国。しかし、その期間に得た学びがあったからこそ、活動先にとっての「いい場」を小池さんは設けられた。

※1　SHEP…School Health Education Program
※2　ティッピータップ…大きめのプラスチック容器に水を入れて設置し、足で踏んで傾けると水が出る、簡易水洗い装置。

小池さんの活動期間と気持ちの変化

2019年1月。ガーナ共和国のセントラル州アゴナ・ウエストに着任。
「ガーナは英語が通じるので、現地のファンティ語を主に学びました」

2020年3月21日。日本に一時帰国。
「活動計画をプレゼンした直後でした」

健康観察期間。「何の役にも立っていない。私は何をしているんだ」と落ち込む

地元の新型コロナ軽症者宿泊療養施設で勤務。
「看護師が足りないと声がかかり、『何かしら手伝えるならば行きます！』と即答しました」

2021年4月。再赴任。「コロナ対策で、ガーナ政府がティッピータップよりも高価な簡易手洗い装置を配っていて、私が計画していたことはすでに実現されていたんです」
カウンターパートの要望を聞き取ることからやり直し、SHEPコーディネーターの合同研修を開催。

2022年1月帰国。

PROFILE

こいけ・このみ ● 看護学部生時代は、バックパッカーやスタディツアーで、アフリカやアジアへ。そのなかには大学の教授から紹介してもらい、協力隊員を訪ねた旅も。卒業後は、国立国際医療研究センター病院（東京）に勤務。3年後、協力隊を志願。

後輩隊員へのメッセージ

新型コロナ軽症者宿泊療養施設の仕事もガーナの活動も、楽しいことばかりというわけではなく、大変なこと、つらいこともありました。でも、目の前のことに集中して、大変な状況も楽しみながら頑張ることで、何事も良い方向に転換するのだと知りました。

中小企業センターの経営コンサルタントの同僚たちと、職場で雑談。日本に興味のあるメンバーが多く、最初に赴任した2カ月間は関係構築と課題抽出のためのヒアリングで終わった

CASE 4 コロナ禍の働き方の変化で着手すべき活動が明確になった

井上 敬さん（ドミニカ共和国／PCインストラクター／2019年度2次隊・東京都出身）

現地もリモートワーク そして見えてきた課題

一時帰国の連絡を受けたのは、2年間かけて取り組むべき課題を抽出するために、同僚にヒアリングをしていたときだった。

「そのヒアリングに行き詰まっていたので、一時帰国することにはホッとした気持ちも正直ありました」

赴任してわずか2カ月後の帰国。そのときの心情を率直に明かしてくれたのは栃木県在住の井上 敬さん。現在はスリランカ人の友人が経営する中古車販売会社で事務手続きなどのサポートを行っている。

井上さんは大学院卒業後に就職した大手IT企業に5年間勤務した。大規模プロジェクトで若手社員に求められるのは、細分化された役割の厳密な遂行だ。いろいろな問題に対応して人の役に立ちたい、外の世界も見てみたい、という思いが募った井上さんは勤務先の企業を退職。海外インターンシップとワーキングホリデーを経験したのち、JICA海外協力隊に応募した。

「ちょうどスペイン語を勉強していたのでドミニカ共和国を希望し、たまたま希望が通りました。私の配属先は中小企業センターという半官半学のコンサルティング組織です。地域の中小企業をさまざまな側面から支援するために、各地の大学に設置されています」

現地で働き始めて感じたのは、職場でも動画を見ながら歌うほど陽気な同僚たちの歓迎ムード。そして、自分への要求度の低さだった。

同僚のドミニカ人コンサルタントたちはMBAを持っている人もいるほど優秀で、中小企業からの相談案件はそれぞれが十分にこなしている。井上さんを待っていたのは、「具体的な活動成果にはこだわらず、何よりも日本人と時間を過ごすことで刺激を得たい」というありがたいような拍子抜けするような環境だった。

「私が前職で学んだようなハイレベルなITスキルを生かせる案件はありません。ホームページはなくてもいいのでインスタグラムやグーグルマップを活用したい、といった中小企業の要望に応えるのは、私より同僚たちのほうが慣れていました」

まじめかつマイペースな井上さんは「何かしらの課題は見つかるだろう」と思いながら同僚へのヒアリングを続けていた。そのうちに新型コロナウイルスが感染拡大。ドミニカ共和国内で外出禁止令が出て、5日後には日本に帰国することになった。

国内での待機中は同僚たちとはグループチャットでつながり、割り振ってもらった作業はリモートで行った。しかし、それだけでは時間を持て余してしまう。

「日本で仕事をしている海外出身の友人たちの買い物や役所への届け出をサポートしていました。役所の書類は漢字にふりがながないことも少なくありません。困っている外国人が多いことに気づきました」

ドミニカ共和国に再赴任できたのはちょうど1年後の2021年3月。任期終了まで9カ月間というタイミングでの再赴任だった。職場の状況は変化していて、井上さんが取り組むべき課題が浮上していた。

「コロナの影響でリモートワークが増え、以前みんながいたオフィスには常時1～2人しかいなくなりました。それまでは各自が管理していたコンサルティング予約でしたが、WEBページ上で受けつけて一元管理する必要性を感じました」

予約管理システムを作り始めた井上さん。さらに、講習会などの案内を送る際に使う顧客リストもデータベース化。リモートでのコンサルティング業務を効率化するため、動画で説明できる仕組みも構築した。その過程には利用者である同僚の協力が必要だ。

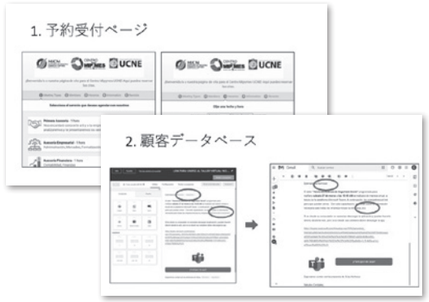
「制作スケジュールは同僚の合意を得ることを心がけました。『自分がOKしたんだからやらなきゃ』と思ってもらうためです」

ホテルでの滞在を余儀なくされ、オフィスには週に1回しか出勤できない期間もあった。孤独感は募らなかったのだろうか。「短期間で成果を出すことに集中したい時期だったのでむしろ良かったです。オフィスに行くと、出勤している同僚から日本について質問されたりして、おしゃべりで一日が終わってしまいますから（笑）」。きっちり仕事をするものの、友好的でもある井上さんは、同僚の質問に対してまじめに答えていたのだった。

深夜まで音楽が大音量でかかっている家が多いというドミニカ共和国流にも適応し、ひょうひょうとした人柄が同僚からも愛されていたのだろう。たまの出勤時は彼らとの親交を深め、そのほかの時間は課題解決の作業に集中するといった環境が、偶然にも整った。

「コロナがなかったらどんな成果を出せたのかはわかりません。でも、コロナで変わった社会状況に合わせて、自分なりの成果を残せたとは思います」

一時帰国中に在日外国人のサポートをした経験を現在に生かしている井上さん。今、語学だけでなくITスキルも活用してサポートする道を焦らずに模索している。想定外の事態に直面しても「何とかなるだろう」の精神で踏みとどまり、自分のできることを探して実践していくのだろう。



再赴任後に作った予約受付ページと顧客データベース

井上さんの活動期間と気持ちの変化

2019年12月派遣国到着。
↓
2020年1月。任地へ。「教会の敷地で神父さんたちと一緒に寝泊まりしていました。職場には乗り合いバスで通勤していたのですが、混雑しているので感染リスクが高いとされ、再赴任後は町中でホームステイになりました」
↓
2020年3月23日。日本に一時帰国。「5月ぐらいには戻るのかな、と思っていました」
↓
「待機」を選び、グループチャットで同僚とやりとり。日本国内で友人の外国人のサポートなどに従事。「数カ月で戻れると思って友人を手伝っていました」
↓
2021年3月21日。再赴任。「Zoomの使い方講習がすぐに開かれたりしていて、ITの世界は先進国と途上国の境がありません。誰もがどこからでも発信し受信できるのだと改めて知りました」

PROFILE

いのうえ・けい ● 大学院でエネルギー分野を専攻し、卒業後は大手IT企業に入社し、スマートエネルギー事業に関するプロジェクトマネジメントに5年間従事。退職後、海外インターンシップ（ベトナム）とワーキングホリデー（ノルウェー）を経験し、JICA海外協力隊に応募。

後輩隊員へのメッセージ

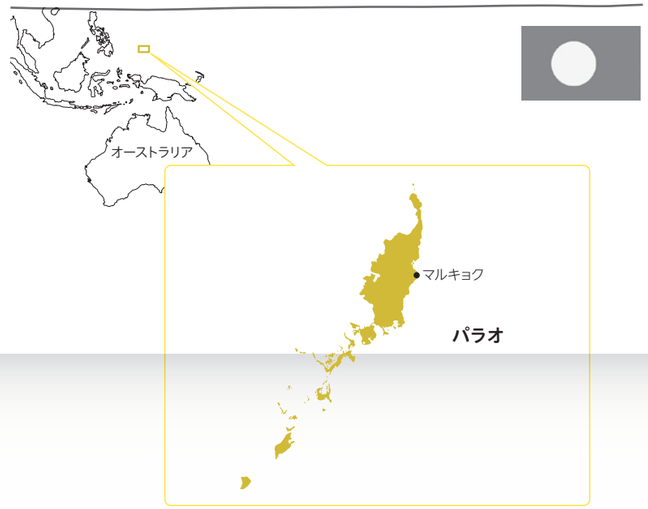
私はリモートワークがしやすい業務内容でしたし、配属先も歓迎してくれました。コロナ禍でもかなり恵まれていたほうです。ただし、状況が変わっても何かしらできることがある、と信じる気持ちは大事にしていました。「幸せの扉が一つ閉まると、もう一つの幸せの扉が開く」というヘレン・ケラーの言葉を、いま改めて思い出しています。

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈パラオ〉

1994年に独立したパラオ。世界遺産の美しい海と暖かい気候が魅力の国です。協力隊の派遣は今年7月で25年を迎えます。

パラオの基礎知識



パラオ

面積：488平方キロメートル（屋久島とほぼ同じ）
人口：18,092人（2020年：世銀）
首都：マルキョク
民族：ミクロネシア系
言語：パラオ語、英語
宗教：キリスト教

※2022年2月25日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/palau/data.html

派遣実績

派遣締結日　：1996年8月29日
派遣締結地　：コロール
派遣開始　　：1997年7月
派遣隊員累計：288人

※2022年4月30日現在
出典：国際協力機構（JICA）

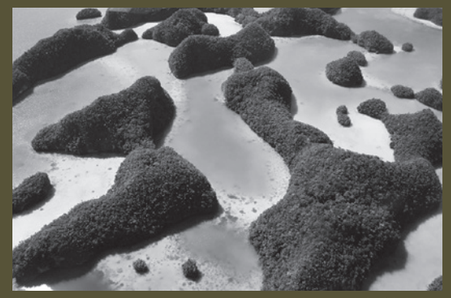
＼ お話を伺ったのは ／

伊藤藍子（いとうあいこ）さん

小学校教諭／2004年度2次隊・大分県出身

PROFILE

JICAパラオ事務所員。大学の教員養成課程（算数教育）在学中にオーストラリア留学や日本在住の外国人コミュニティでのボランティアなどを経験し、新卒で協力隊に参加。帰国後は小学校の非常勤講師を経て、2007年からパラオの旅行会社に勤務。20年8月から現職。



世界遺産となっているロックアイランド。大小400以上もの無人島が点在する（伊藤さん提供）

日本との歴史的な小さな島国

日本が第2次世界大戦の終わりまで統治し、戦争末期には日米の激戦地となった重い歴史もある国、パラオ。協力隊のパラオOVで、現在、JICAパラオ事務所員の伊藤藍子さんに話を聞いた。

パラオ共和国（以下、パラオ）は日本の真南約3000キロの太平洋にある大小約600の島で構成され、屋久島ほどの面積に約2万人が暮らしている。

日本による委任統治の始まりは1914年。第1次世界大戦により、パラオを含むミクロネシアのドイツ領を引き継ぎ、第2次世界大戦終結まで31年間統治した。旧首都コロールには南洋庁の本庁が設置され、教育から産業育成に至るまで南洋統治の中心地となり、パラオ人の約3倍の日本人が住み、パラオの言語や文化に大きな影響を与えた。そして、第2次世界大戦の末期には日米の激戦地となり、多数の戦死者を出した。一方、南部のペリリュー島では日本軍は島民たちを脱出させて守ったという逸話があり、親日のゆえんの一つとされる。戦後70年の2015年には、上皇・上皇后両陛下（当時は天皇・皇后両陛下）がこの島を慰霊に訪れた。戦後、パラオを含むミクロネシアは1947年に国連の信託統治領としてアメリカの統治下になり、93年にアメリカとの*自由連合盟約を住民投票で承認し、94年に独立を果たした。日本は独立以前から開発協力を行い、国際空港ターミナルをはじめ、日本・パラオ友好の橋、コロール市内の主要な道路などインフラ整備に貢献した。

JICAパラオ事務所の開設と協力隊の派遣は97年で、今年は共に25周年。第一陣の派遣となった野球、陸上競技、看護師2名の計4名に続き、算数教育やスポーツ、保健医療、環境、インフラ管理などの分野で、288人が派遣されてきた。近年は肥満対策と予防のため、学校給食の改善や運動を指導する隊員もいる。「隊員の活動は高く評価され、活動終了後は配属先に雇用されてパラオに残るケースも少なくありません」。2021年に日本政府から叙勲された藤勝雄さんもその一人。シニア海外ボランティアとして04年に派遣され、国唯一のリサイクル処理施設の運営に携わり、任期後は州政府コンサルタントとして同施設を拡充させた。

「パラオは協力隊派遣国のなかではかなりユニークな国。日本との時差がなく、テレビでNHKを見ることができ、日本の食品も豊富にあります。日本由来の言葉や作法が生活に溶け込み、ラジオからは演歌も聞こえてきて、まるで日本の離島にいるような気分になります」

また、人口の少ない国であるゆえに人とのつながりが強いことも特徴だ。「ホームステイをすると、その家族の一員として親戚や地域からも受け入れられます。パラオ語も覚えられ、コミュニティでの活動もしやすくなるため、お薦めしたいです」

学校の文化発表会で踊りを披露する子どもたち（伊藤さん提供）

＊自由連合盟約…米国の統治から独立する際に、米国との間に結ばれた盟約。米国から財政支援を受ける一方で、国防と安全保障の権限を米国に委ねる。

Text＆Photo（P.17森迫さん顔写真、森迫さんのノート）＝工藤美和　プロフィール写真提供＝ご本人（P.17を除く）

算数とスポーツで人材育成に貢献

パラオの初等算数教育分野の協力に関わった3人のOVと、パラオ人選手を東京2020オリンピック出場につなげたOVを紹介する。

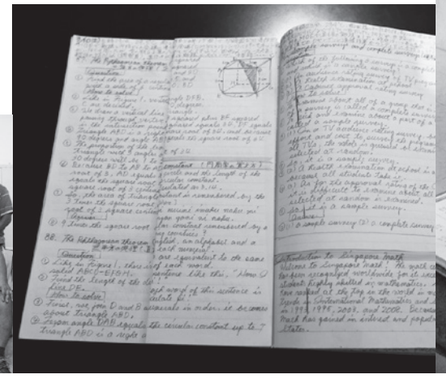
森迫辰夫（もりさこたつお）さん

SV／数学教育／2016年度2次隊、SV／マーシャル／数学教育／2019年2次隊・大分県出身

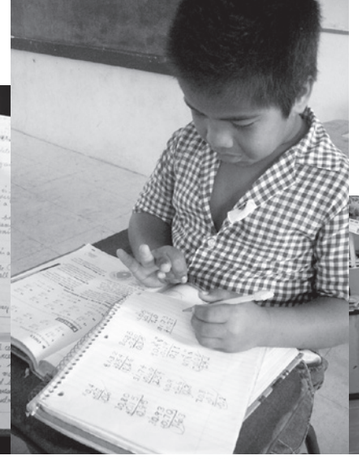
PROFILE

宮崎県の高校で38年間数学を教える。定年前にシニア海外ボランティアに応募するも、数学教育に求められるハイレベルな英語力が壁となり不合格に。定年後は地元のシルバー人材センターで働きながら英語学習を続け、足かけ4年、6回目の受験で合格。パラオの後はマーシャルにも派遣されたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、2020年3月に一時帰国し、再派遣を待つ。

討論会を行った高校生と高校の先生、討論会を見に訪れた教育大臣、手伝った協力隊員たちと（森迫さん提供）



森迫さんが模擬授業を行う際に作った自分用のノート。板書内容や話すこともすべて英語で書き込んで授業に臨んだ



伊藤さんが教えた生徒。手を使って計算問題を解いていた（伊藤さん提供）

放課後、授業でわからなかったことを聞きに来る生徒に教える廣瀬さん（廣瀬さん提供）

廣瀬留美子（ひろせるみこ）さん（旧姓 山本）

小学校教諭／2003年度1次隊・沖縄県出身

PROFILE

大学の教員養成課程（算数教育）卒業後、約3年、塾講師などを務めたのち、協力隊に参加。帰国後は大学院で国際社会学を専攻し、パラオの子どもたちと社会について研究。パラオOVの夫の仕事に伴い、パラオ、ザンビア、高知県で生活。中学校の不登校支援員、高知県国際交流協会（南米の日系研修員担当）、JICA四国の国際協力推進員を経て、2022年4月から高知県外国人生活相談センター相談員。

1997年に始まったパラオへの協力隊派遣で人数が多いのが教育文化部門だ。これまでの派遣人数の約3分の1を占める。当初は体育教師を派遣していたが、生徒たちの算数の学力の低さに気づいた隊員たちが自発的に算数の授業を行ったことが教育省で高く評価され、以来、初等算数教育に重点を置いた支援が続いている。

2003年、廣瀬留美子さんはパラオで一番大きなバベルダオブ島最北にあるアルコロン小学校への初めての隊員として派遣された。パラオの義務教育は、8年制の小学校（日本の小学校1年から中学2年まで）と4年制の高校（同じく中学3年から高校3年）からなる。廣瀬さんは、7、8年生に算数を教えることとなったが、8年生に対し実施した基礎学力テストで驚いた。

「四則計算で両手両足を使い、それでも足りないと、紙に棒を書いて数える生徒が多かったんです」

廣瀬さんは、低学年で学ぶ四則計算の基礎から教えようとしたが、授業についていけない生徒たちのおしゃべりが絶えず、定期テストではカンニングをする生徒も多かった。いわゆる学級崩壊の状態で、教える自信をなくしてしまった廣瀬さんは、半年たった頃に校長に相談し、低学年に担当を替えてもらって活動した。

1年後にコロール州のミューンズ小学校に派遣されたのが伊藤藍子さん。この学校にとって2代目の隊員で、低学年に基礎を教え、高学年の授業では教員をサポートした。

「当時は、公用語の英語が身についていないうちにアメリカの教科書を使って算数を教えていて、生徒は混乱して理解が進まないという事情もありました。計算練習が少なくやり方が身についていないうえ、小学校高学年以降は授業で電卓使用が許されるため、先生自身も算数を苦手としていました」

伊藤さんによると、この問題は現在も続いているという。「原因は、まず、教員採用試験がないこと。当時小学校の先生は、校長が地域で人材を探してきて学校で教えてもらうのが一般的で、ほとんどが高卒です。教員の給料も安く、教え方を知らない先生や、教える意識の低い先生がほとんどでした」。

こうした状況でどのように生徒の学力を上げ、先生の指導力の向上にも取り組むのか。小学校教諭隊員と教育省に派遣されている隊員による「算数部会」が始まった。

「数の概念や計算を視覚で理解できるよう教え方を工夫する、英語版の九九を毎授業の始めに暗唱させる、百ます計算やプリントを繰り返し行うという各隊員の取り組みを共有したり、各学年のカリキュラム構成を検討して教育省に提案したりしました」

算数に親しむ工夫を積み重ね マス・ヒーローを生んだ算数部会

その後、算数部会は、代々の隊員が活動を引き継いでいき、研究授業やワークショップの実施、教材作成などをしていった。

ベテランの数学教師である森迫辰夫さんは定年退職後の16年に協力隊に参加し、教育省に派遣された。代々、教育省に派遣されたシニア隊員は、教育省の同僚と共に各学校を巡回しながら教員へ助言や提案、模擬授業を行い、指導法の改善のための研修会の実施やカリキュラムの制定・改定に取り組むと共に、算数部会による提案を教育省につなげる役目を果たしてきた。森迫さんに廣瀬さん・伊藤さん以降のパラオの算数教育の実情を伺ったところ、隊員らの試行錯誤の様子が見えてきた。

05年派遣の隊員たちが中心になって作った小学校1年生用の算数テキストと教師用指導書があるほか、18年には「マス・ヒーロー・ドリル」という各学年のレベルに分けた計算ドリルをマニュアルと共に完成させ、全公立小学校への配布を実現し、現場での積極的な利用につなげている。「マス・ヒーロー」とは、暗記やドリルで満点を達成できた生徒をそう呼んでクラスみんなでほめること。生徒に算数に親しんでもらえるよう工夫を凝らしてきたことがわかる。

一方で、森迫さんがパラオの全公立学校（小学校18校と高校1校）を視察して感じたのは、学校や学級運営が弱いことだった。「職員会議がないため、同じ学校にいる先生たちが一緒になって学校の方針や目標、課題を考えたことがない。『学力を伸ばそう、指導法を良くしよう』と、外国人ボランティアが働きかけても限界がありました」。

そこで森迫さんは、算数教育の当事者である生徒と教員に「この国の算数教育の向上のために必要なこと」をテーマに討論してもらうことを教育省に提案し、高校と二つの小学校での開催にこぎ着けた。議論して、それらのアイデアをまとめるKJ法*を使った。

小学校時代を振り返った高校生からは、授業中にスマートフォンを見てしまい勉強に集中しなかったという反省と共に、教員の能力不足が改めて指摘された。教員同士で議論した小学校からは「なぜ生徒が学習で苦労するのか、生徒の長所・短所や教え方について考えることができた」「自分の教室だけでは気づけなかった生徒の問題の原因や解決策を共有できてよかった」といった声が寄せられた。

高校生によるまとめの発表を聞いた教育大臣は、「学力が上がらないのは子どもたちのせいではないことがわかりました。教える私たちがなんとかしなければならないと思っています」と森迫さんに話した。

「急に変わることは難しいですが、少しでもパラオの教育関係者に刺激を与えられていたら嬉しいです」（森迫さん）。

活動の舞台裏

ずぶ濡れになりながら 日本の被災者へ募金活動

2018年7月、パラオ教育省のオフィスにいた森迫辰夫さんは、教育省前の道路でドライバーに募金を促す声に気づいた。「よく聞いてみると、その1週間前に起きた西日本豪雨災害の復興支援のための募金活動をパラオ赤十字社の人たちが行っていたのです。日本の被災者のために頑張っている姿を見たら、居ても立ってもいられなくなって、私も参加させてもらいました」。

パラオでの募金活動は日本とは違い、車のドライバーに声をかけていく。ドライバーはスピードを落とすか止まってお金を渡す。その間渋滞しても文句が出たりクラクションを鳴らしたりはしないという。

しばらくすると、警察学校の若者約20名が隊列を組んで歩いてきて、募金活動を手伝い始めた。途中、急なスコールに見舞われても、募金活動は止まらなかった。ずぶ濡れになりながら、雨の音にかき消されないよう大声でドライバーに叫んでいた。「その姿を見たら嬉しくて嬉しくて、涙と雨で私もずぶ濡れになりました」。

スコールのなか、大声で西日本豪雨災害への募金を呼びかける警察学校の生徒たち（森迫さん提供）

ドライバーが森迫さんに手渡した金額だけで約500ドル（約5万5千円）になった。「日本ではこんなに集めたことはなくて驚きました。日本を思うパラオの人たちの気持ちに触れ、私ができるパラオへの恩返しは何だろうと今も思います」。

＊KJ法…文化人類学者の川喜田二郎氏がデータをまとめるために考案した手法。データをカードに記述し、カードをグループごとに集約し図解し、まとめる。共同での作業に用いられ、創造的問題解決に効果があるとされる。

2002年に開通した、日本・パラオ友好の橋。パラオ共和国の旧首都コロール島とバベルダオブ島を結ぶ（伊藤さん提供）

パラオの小学生向け陸上クラブで代表チームの選手たちに手伝ってもらって行った小さな競技会（本多さん提供）

本多美月（ほんだ みづき）さん
陸上競技／2017年度1次隊・愛知県出身

PROFILE
小中学校で新体操、高校・大学と陸上競技に打ち込む。大学ではスポーツ科学を専攻。大学卒業後、1年間の非常勤講師を経て、協力隊に参加。帰国後は茨城県常陸大宮市の任期付職員を経て、2021年から愛媛県今治市をホームタウンとするプロサッカークラブFC今治の運営会社・株式会社今治.夢スポーツに勤務。

オリンピック選手指導からパラオのホストタウン支援へ

初等算数教育に重点が置かれたものの、その後もスポーツ隊員は派遣され、陸上や水泳などのパラオ人選手の国際大会での活躍に貢献している。

17年にパラオ陸上競技協会に派遣された本多美月さんもその一人だ。大学4年まで陸上を中心に送ってきた競技生活に一区切りをつけたとき、東京オリンピック・パラリンピックまでに100カ国以上、1000万人以上の人々にスポーツの価値を届ける日本の官民連携の国際貢献プロジェクト「SPORT FOR TOMORROW*」を知った。

「なんらかの形で東京オリンピック・パラリンピックに関わりたいと思っていたので、『これだ』と思い、プロジェクトにも含まれていた協力隊に応募しました」

パラオでは東京オリンピックを目指す代表チームの指導をはじめ、幼児や小学生への陸上競技の普及、コミュニティを対象にしたランニングやウォーキングイベントの運営を行った。

ところが、陸上代表チームの選手と接してみると、練習時間に遅刻する、無断欠席をする、道具をきちんと管理しないなどが目立った。選手のスポーツに対するマインドの低さに驚いた本多さんは、道具の管理方法など環境整備の大切さを根気強く伝えていくことにした。同時に、日々の練習を重ねながら定期的に記録を計測し、選手たちが自分の成長を感じていけるように指導した。

オフシーズンには選手たちにさまざまな種目にチャレンジする機会を設けた。「初めて棒高跳びを行ったときは環境が整っていないため、走り高跳びのマット、砂場、竹を使いました。選手は最初こそ怖がっていましたが、次第に楽しんで取り組むようになりました」。

そのほかにも、選手が全くいなかったハードルを中心に、跳躍、投てきなど幅広い種目の選手を育成した結果、18年7月の大洋州の国と地域による国際大会「ミクロネシア・ゲーム」では、ほぼすべての種目に選手がエントリーできたうえ、ハードルには5人の選手が出場し3個のメダルを獲得、4×100mリレーの金メダルを含め全種目合計で16個のメダル獲得を成し遂げた。

その後、東京オリンピックにも関わった本多さん。18年6月に、パラオのホストタウンとなった茨城県常陸大宮市での陸上代表選手5名の事前キャンプに同行し、その縁から、任期終了後に同市の任期付職員となりホストタウンの交流事業に携わった。

「パラオでは物事が計画どおりに進まなかったり、自分の考えていたように教えることができず、はらはらイライラすることが多かったのですが、パラオの人の考え方や働き方に触れ、人と人のつながりや心の豊かさが大切だと思うようになり、柔軟に対応できるようになりました。そして、パラオの人たちがのびのびと運動を楽しむ姿は、競技をする者にとって大切な原点を思い出させてくれました」

*SPORT FOR TOMORROW…2014年から20年までの7年間で、世界のよりよい未来のために、開発途上国をはじめとする世界のあらゆる世代の人々にスポーツの価値とオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを広げていく取り組み。

活動の舞台裏

「キンタロウさん」と「カトウサン」日本の響きを持つ名前

パラオには、イチロウ、ヒロコ、キミコと日本語の響きを持つ姓名の人がいる。「キンタロウ」「マサオ」は日本では名前だがパラオでは名字の場合もある。

廣瀬さんや伊藤さんの隊員時代、教育大臣の名字は「カトウサン」。「サン」までが名字で、「ミスター・カトウサンでした」（廣瀬さん）。元々、パラオに姓はなく、日本やアメリカなど統治を受けた国の影響を受けて姓を名乗るようになったそうだ。「日本人の血を引くためそうした名前を持っているわけではなく、パラオでは家系を大切にするため祖先から名前をもらうことが多く、昔の人が統治時代に先生やお医者さんなど尊敬する人や親しかった人と同じ名前を子どもにつけ、今でもその名前が引き継がれているからだと思います」（伊藤さん）。寺社などにある石灯籠を由来とする「イシドロ」さんもいて、「耳心地が良いからつけたという話も聞きました」（廣瀬さん）。

名前のほかにも今もパラオ語のなかに日本語に由来する言葉が残っており、日常会話で使われる日本語の語彙（ごい）は約2割にもなるといわれている。冠婚葬祭などの伝統行事を意味する「シューカン」もその一つ。「お葬式と第1子出産を祝い母体回復を祈るベビーシャワーの二つが大きな『シューカン』で、一族総出で行います。世界でこれほど日本の名前や日本語が使われている国があるのは日本人にとって驚きの事実ではないでしょうか」（伊藤さん）。

おしゃれをして「シューカン」に出席したママさん（廣瀬さん提供）

「パラオの人たちは明るくて優しい。隣に住んでいた部族の長と仲良しで、家族でその家に行ってはみんなでご飯を食べたんだよ」

廣瀬さんの母親は、パラオ生まれで4歳まで現地で過ごした。母や母方家族からその思い出を聞いてきた廣瀬さんが、パラオを派遣先に希望したのは自然な成り行きだった。赴任してからの廣瀬さんは、毎日のように散歩をし、村の人たちに話しかけた。人々の暮らしや小学校の生徒たちのことを知るため、そして、母たちが話していた日本統治時代のことを聞いてみたかったからだ。

そんなとき、ある女性から突然、「ここで日本が何をしたのか知っているのか」と怒りを込めた言葉をぶつけられた。

パラオの人は親日と思い込んでいた廣瀬さんは驚き、「何をしたのか」を知らない自分を恥ずかしく感じた。以降、廣瀬さんは「日本人が統治時代にしてきたこと」を図書館で調べたり、人々に聞いたりして学んでいった。

そして、統治時代、日本は一等国民である日本人と二等国民である沖縄人、そしてそれ以下の階級にパラオ人を置いていたこと、日本の学校教育が厳しく、時には体罰もあるという印象が受け継がれていることを知った。

かつて日本の統治下にあった国への派遣で思うこと

「二重三重のショックでした。日本人がパラオ人を差別したことは、関東にいた学生時代にバイトの面接で、私が沖縄県出身と知ると、『日本語話せる？』と言われたことを思い出させました。また、私の父は沖縄戦で家族を失い一人だけになりました。私は差別や戦争に対するつらい思いを知っているはずなのに、『日本から教えに来た』と上から目線で話していた。活動のいろいろなことがうまくいかない違和感の正体でした」

ちょうど赴任して半年の頃で、授業に行き詰まり、ホームステイ先家族との溝も深まっていた。配属先は地方の伝統的な生活を送る村で、廣瀬さんは戦後初めて住んだ日本人だった。

「村には日本統治時代に嫌な思いをした方もいるなかで、ホストファミリーは私を受け入れてくれたのに、私はパラオ語を話せず、生活スタイルも違ってかみ合わなくて。結果、『出て行ってほしい』と言われてしまいました」

思い詰めていた廣瀬さんを救ったのが、日本語が堪能な高齢のパラオ人女性だった。ホームステイを快く引き受けてくれた。

「ママさん」と廣瀬さんが呼んだその女性は、統治時代に日本語教育を5年受けただけだが、毎日、NHKを見て、食事はご飯とみそ汁。日本語の本を読み、健康のために畑作りをするほど生活に日本を取り入れていた。

「日本人と結婚する話があったけれど、戦争でかなわなかったそうです。普段は日本への強い思いを周囲のパラオ人には話せない。唯一話せたのが私だったのでしょう、いろいろな話をしてくれました」

ママさんは、廣瀬さんに日本語でパラオ語や生活について教え、活動の悩みを聞き、大きな支えとなってくれた。廣瀬さんは地域の文化・歴史的背景を学びながら、人々や子どもたちに溶け込む努力を続け、任期終了後は、パラオをフィールドに研究を行うまでになった。

ペリリュー島最南端の「西太平洋戦没者の碑」（宮崎聡美さんパラオ／小学校教諭／2011年度1次隊・大分県出身提供）

ママさんが大好きなみそ汁を一緒に作る廣瀬さん。みそ汁にはココナッツミルクを入れていた（廣瀬さん提供）

*茨城県常陸大宮市…戦時中、ペリリュー島に派遣された部隊の一つが水戸歩兵第2連隊だったため茨城県出身の戦死者が多く、同市出身者も75名いた。戦後、慰霊訪問に始まる交流が続き、ホストタウンとなった。

専門家に聞きました！

失敗に学ぶ

現地で役立つ人間関係のコツ

今月のテーマ：物をねだられたときの対応

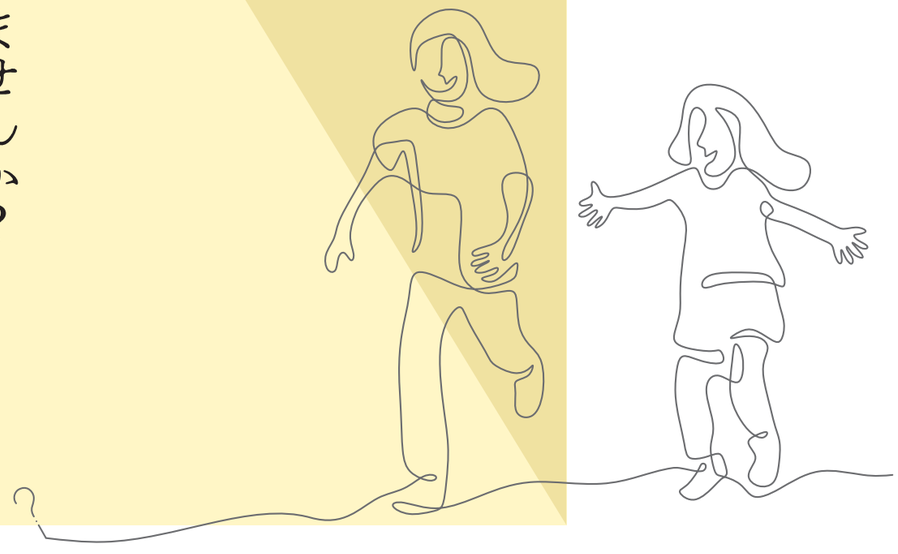
今月のお悩み

活動地域の子どもたちに会うと駆け寄って来て「お菓子をちょうだい」とねだられます。毎日はあげられないので、いい断り方はありませんか。

（青少年活動／女性）

地域の小学校を巡回して活動しています。どの町・村の人々も優しく、温かく迎えてくれるので差別を受けるといった嫌な思いをしたことはありません。ただし、外国人はお金持ちといった感覚があり、子どもたちが駆け寄って来て、笑顔でお菓子や物をねだられることが多々あります。

どの子もおなかをすかしているのはわかるのであげたい気持ちはあるものの、毎日全員にあげることはできません。上手な断り方や逃げ方など、いい対処法があれば教えてください。



太田先生からのアドバイス

物以外で、あなたがあげられるモノはありませんか？ 掛け合いのコミュニケーションと捉えて楽しんでみましょう。

今月の教える人　太田美帆（おおたみほ）さん

ガーナ／村落開発普及員／1996年度1次隊・茨城県出身

JICA国際協力専門員（農村開発分野）。玉川大学リベラルアーツ学部教授。2021年度までコミュニティ開発職種の技術顧問。世界各国の農村でお母さんを元気にする生活改善活動に携わる。共著書『世界に広がる農村生活改善：日本から中国・アフリカ・中南米へ』（晃洋書房）、共訳書『貧しい人を助ける理由』（日本評論社）など。

すごくよくわかります！　任地で物をねだられるのは日常茶飯事ですよね。私も村落開発普及員（現コミュニティ開発）としてガーナのガ族の村に赴任したばかりの頃はこれにうんざりしていました。

ガ語では大人同士でも、「こんにちは」などの挨拶に続いて、「で、今日あなたは何を持ってきたの？」と必ず聞かれたからです。子どもたちに至っては、一度キャンディをあげたら最後、次から顔を見るなり「キャンディちょうだい！」と囲まれ、いつの間にか私のあだ名は「キャンディ」になっていました。

「対等な関係になりたいのに、物をあげないと仲良くしてもらえないのか」と悩みましたし、「支援慣れをしていて、大人まで私が物を配って当然と思っている。それにしても顔を見るなり『何を持ってきたの？』はないんじゃないか」と苦々しくも感じていました。「キャンディ」と寄ってくる子どもたちに、「私はキャンディじゃない。美帆よ！」と追い返したりと、イライラが募っていました。

ところが、そんな私の上から目線の思いを覆す出来事が起こったのです。

ある日、いつも「キャンディ」と言ってくる女の子が、たまたまキャンディを一つだけ手にしているのに気づきました。そこでその日は私から「ちょうだい」と手を出してみたのです。どんな反応をするだろう、それくらいの軽い気持ちでした。でも、言われた女の子は真剣に悩み始めました。そして顔を上げると、キャンディを自分の口に放り込んだのです。

そして次の瞬間、女の子は半分に割ったキャンディを口から出し、私に差し出しました。

女の子が悩んでいたのは、どうしたら独り占めできるかではなく、どうやったら分けられるかだった――。子どもでさえ、持っていない相手と分かち合う行動をすると知り、衝撃を受けました。イライラしていた自分に恥じ入り、反省しました。

この一件から、改めて人々を観察したところ、ガーナの人たちは分け合い助け合いの精神を当たり前に持っていることや、「今日は何を持ってきたの？」は、地元の人同士でも一般的に使われている単なる挨拶言葉だと気づきました。

ガーナでは、会話によるコミュニケーションを大事にする文化があります。知り合いを見つけたとき、急いでいても、遠くから手を振って通り過ぎるような行為は許されません。「なぜここまで来て話していかないの？」と叱られます。だから、出会った人に期待する「今日持ってきたモノ」とは、形ある物に限らず、会話の「タネ」でよく、ある意味、そうした会話の掛け合いを楽しんでいたのです。

例えば、「市場でトマトがこの値段で売っていたよ。お母さんはいくらで売ったの？」とか、「ラジオの天気予報で、来週は雨が降るって言ってたよ」といった実用的な情報から、「昨日こんな面白いことがあってね」といったくだけた話まで、どんな「タネ」でも盛り上がります。

村の人々は物への期待以上に、私とのコミュニケーションを楽しもうとしていたのです。お菓子をねだる子どもたちにも、「キャンディはないけど、これをやって遊ぼう」とか、「一緒に歌おう」と言えば、大喜びでさらに多くの子が寄ってきました。彼らも私と仲良くなるきっかけを探していたんです。

以降、手ぶらでも臆せず地域に入り、会話を積極的に楽しめるようになり、村人から多くを学びました。皆さんも物をねだられたときは、物以外で何が提供できるかを考えてみてはどうでしょう？　きっと仲良くなるチャンスですよ。

Text＝ホシカワミナコ（本誌）　写真提供＝太田美帆さん　※質問は現役隊員やOVから聞いた活動中の悩み

この職種の先輩隊員に注目！

～現場で見つけた仕事図鑑

#0011

「野菜栽培」

分　　類：農林水産

派 遣 中：4人（累計：1,594人）

類似職種：食用作物・稲作栽培、花卉栽培、病虫害対策、土壌肥料など

※人数は2022年4月末現在。

CASE 1

立崎安寿香（たちざきあすか）さん

インドネシア／2017年度2次隊・青森県出身

PROFILE

大学で開発学を学び、途上国の農業に関心を持つ。留学を機にインドネシアと関わる仕事がしたいと考え、農業でインドネシアでの地域発展を目指す株式会社農園たやに就職。現職参加制度で協力隊に参加。

配 属 先：タンジュンサリ農業高校

要請内容：農業高校で日本の野菜の栽培技術指導、生産管理方法のアドバイス、学生の実技授業を行うための栽培歴に合わせた圃場（ほじょう）管理方法のアドバイス

CASE 2

木村純平（きむらじゅんぺい）さん

コロンビア／2016年度1次隊・群馬県出身

PROFILE

大学、大学院でミミズなどの土壌生態系を生かした土壌改良を研究。帰国後、大学の研究員を経て、現在はアウトドア企業に勤務。環境・社会部門の担当者として、環境再生型の食と農業の事業に携わっている。

配 属 先：NGOコンプロミソ

要請内容：地域に適した野菜の選定と適切な栽培方法の指導。ミミズコンポストなど堆肥の作り方、野菜の採種方法などを、NGO職員に対して助言

野菜作りへの関心をどう高めていくか 技術以外のアプローチも重要

活動の基本

「野菜栽培」の職種の要請内容は多岐にわたる。農家や農業高校、職業訓練校の生徒に対する実習指導、学校や医療施設における家庭菜園での技術指導など、栽培技術を直接指導する活動のほか、研究機関での育種・品種改良の支援、病害虫対策、土壌改善、環境循環型農業や有機農業の普及、さらに、所得向上につながる農家の経営支援、栄養改善や料理法の普及活動などの要請もある。

CASE 1 農業高校の講師として日本の農業を伝える

学生時代に留学した経験から、インドネシアに関わる仕事をしたいと考えた立崎安寿香さんは、福井県の株式会社農園たやに就職した。代表の田谷（たや）徹（とおる）さんは青年海外協力隊員としてインドネシアで活動した経験（食用作物・稲作／1997年度2次隊）を持ち、2008年から農園たやではタンジュンサリ農業高校の卒業生を農業支援プログラムの実習生として受け入れていた。同社で約2年、野菜の栽培や販売の経験を積んだ立崎さんは、現職参加制度を利用して、タンジュンサリ農業高校に赴任した。要請は日本の野菜の栽培技術指導だったが、最初の半年間は授業や校内活動を見学し、農業高校で自分が生徒たちに何を伝えられるかを考えた。

「授業を見学していると、生徒たちは、日本では機械化が進んだ先進的な農業を行っているという憧れを抱いているように感じました。インドネシアでは圃場（ほじょう）に入るための道が整備されていませんから、農業機械があっても、うまくいかないこともあります。私はまずは生徒たちが自国の農業を理解したうえで、日本の農業と比較し、自分たちにあった農業のやり方を選択することが重要だと考えました」

同校は、日本の詰め込み式の授業と違い、生徒に考えさせる授業を行っていたことから、授業では両国の農業の違いを、パワーポイントなどを使い視覚的に説明し、生徒に自国の農業を考えてもらうように工夫した。

授業とは別に、生徒が自主的に栽培や販売を行っている「野菜クラブ」に参加し、生徒たちと一緒に日本野菜の栽培にも取り組んだ。インドネシアでは日本食ブームの高まりで日本野菜への需要が高まっており、生徒たちの関心も高かったからだ。しかし、環境の整った日本と違い、インドネシアでは1年の半分は乾季であり、肥料は鶏ふんや牛ふんが中心だった。自分の経験や知識は役に立たないと判断した立崎さんは、現地の農業を熟知する実習担当の先生に声をかけ、共に技術的な指導に当たってもらうことにした。

「ナスやキュウリなどの一年生作物の場合、雨季と乾季のあるインドネシアで栽培できるのは年に1度程度です。2年という任期を有効活用するためには、自分ひとりでなんとかしようとするのではなく専門家などとのつながりをつくり、一緒に考え行動していくことが大切だと感じました」

現在、農園たやで受け入れている実習生には、当時の教え子もいる。

「農業、野菜栽培を通じて、インドネシアを担う人材を育てたい」

野菜栽培隊員としての立崎さんの活動は、今も続いている。

CASE 2 ミミズの力も活用し農地の土壌改良に貢献

ミミズという、健全な土壌に重要な働きをする生物の機能に興味を持ち、大学・大学院でミミズに関連する研究に取り組んできた木村純平さん。ミミズコンポストを含めた堆肥作りの知識を持つ野菜栽培隊員の募集を知り、大学院修了後、協力隊に参加した。

配属先は、コロンビアで農家の自立のため農業・環境・人権に関わるプロジェクトを実施している地元のNGO。農業プロジェクトでは、9農村を対象に自給率の向上や収入の安定、栄養改善を目的とした栽培指導を行っていた。木村さんへの要請内容は、同プロジェクトのメンバーとして農家への技術指導をすると共に、同僚となるNGO職員に助言を行うことだった。

最初の9カ月間は、現状を把握するために農村を巡回し、土壌が流亡しやすい中山間地域で傾斜地に適した土地管理がなされているか、現地農家の技術や工夫、その意図を見て学んだ。同僚に自分がどんな視点で農村を観察しているのか知ってもらうため、写真つきの文書にまとめて共有もした。

その後、自らの活動を、傾斜農地の管理とミミズコンポストに絞り、行動を開始した。農地の管理では、農家の協力を仰ぎ三つのデモ農場を作り、農家と共に畝立てを行い土壌の流亡を防ぐ段々畑を作り、有機物で覆う土壌作りを行った。従来管理の農地との違いを比較するため、隣同士で示すようにした。ミミズコンポストについては、農村巡回の際にワークショップを開催し、家庭の生ごみや家畜のふんなどを利用した堆肥作りを紹介した。興味を持った農家には堆肥用ミミズを渡し堆肥作りをしてもらい、その後の経過も記録した。「うまく説明して、メリットを納得してもらうことが大切です。作物の生育の違いが明らかになってくるとわずかながらも主体的に畝立てやミミズコンポストを導入する農家も現れ始めました。自分の活動が彼らにとって一つのきっかけになったのは、私自身にとっても嬉しいことでした」

また、「野菜を育てても、もともと野菜を食べる習慣の少ない現地の人たちに、サラダを食べていたら〝ウサギの餌のようだ〟と言われたこともありました。栽培指導で終わらせず、収穫した野菜にオリーブオイルや塩をかけて簡単においしく食べられる工夫やレシピの普及を手がけることも、野菜栽培隊員の大切な仕事だと感じました」。

❶クラブ活動の昼休み。バナナの葉っぱの上にご飯とおかずを広げて、生徒たちと一緒に昼食を取る（立崎さん提供）
❷授業で日本の農業や簡単な日本語について説明する立崎さん
❸いくつもの村から有志が集まり、木村さんたちが作ったデモ農場を視察する

Text＝油科真弓　写真提供＝立崎安寿香さん、木村純平さん

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生

西口記子さん

（ベナン／小学校教育／2016年度1次隊・大阪府出身）

ベナン共和国では地方都市ホエヨベ市の教育行政機関に配属。市内の小学校を巡回して活動を行いました。写真左が西口さん。

運動会開催を中心とした体育授業の支援

2016年7月から2年間、アフリカはベナン共和国のホエヨベ市に赴いた西口さん。「子どもたちが仲間と関わりながら楽しく学べる経験を増やす」ことを目標に掲げ、小学生に体育と図工の指導を行いました。体育の取り組みとしては「心と体を育む体育教科の普及」のために運動会を実施。派遣中、2校で3度の運動会を開催しました。教員数40名・児童数約1700名にもなる大きな学校もありました。生徒はもちろん教員にとっても運動会は初めての経験のため、すんなり受け入れられないこともありましたが、共に行事をつくりあげることができました。

ベナンの国旗に使われている赤・黄・緑のハチマキを着けた子どもたち

開催までのスケジュール／準備のポイント

ポイント

ベナンでは10月に新学期が始まるため、最初の1～2カ月は運動会の提案とミーティングに充てました。年末の12月ごろから練習を始め、全体練習を行い、5月の開催を目指しました。教員の先生たちの協力が不可欠なので、先生たちと仲良くし、運動会の教育的な意義についてフランス語で説明できるようにしました。体力面だけでなく情操面を育む指導であると強調しました。

運動会開催までのスケジュール

10～11月	10月、新学期スタート。運動会の教育的なメリット、意義について教員たちに説明する。
12～5月	競技の練習を始める。週に1～2回、朝8時から約1時間の体育の授業に、毎回ではないが練習を取り入れた。12月～1月はクリスマス休暇と重なるため、あまり練習時間が取れなかった。
5月	運動会開催の1週間前に全体練習を行った。児童全員で整列の練習もした。
運動会開催	

提案

書類を作り、日本の運動会の写真も見せて説明しました。一部の種目は競技を実演してみせるなどして「運動会とは何か」を理解してもらいました。共につくりあげるという気持ちが基本だと思いました。

練習時間

各学年とも週に1～2時間、体育のための時間が取れたので、主な指導は私が行い、現地の先生には指導補助として授業に参加してもらいました。

先生たちとのスケジュール共有

練習時間を決めても時間どおりに来ない先生もたまにいました。先生向けに体育の時間のスケジュールを表計算ソフトで色分けして作り、「この日の何時からはこのクラスがグラウンドで練習」などと、カレンダー形式でひと目でわかるようにしました。

服装

生徒全員で体操服などをそろえることは難しかったので、3色のチームカラーのハチマキを用意しました。

準備

物品が不足しているため、現地にあるもので工夫しました。生徒たちのなかから総合司会、得点係を決め、得点表示のための道具を作りました。

全体練習

教員が全体の流れと動線を確認するために、全体練習を開催1週間前に行いました。およその入場位置、退場位置を決めましたが、特別な大道具などは作っていません。

運動会当日

開催は平日の午前中で、保護者の方や地域の方に観覧に来てもらいました。準備運動と入場行進は全校生徒が参加。下の競技のほかに、3年生は布に乗せたオレンジを落とさずに運ぶオレンジリレー、4年生は二人三脚を行いました。お弁当の習慣がないので、運動会はお昼で終了としました。

活動のヒント

日本で行われている運動会の意義を伝えることが目的でしたが、開催にあたっては現地の人々が主体となって取り組むことや、現地の文化や考え方を尊重しました。現地の人々の行動のきっかけ・選択肢を増やすことができたと思います。

運動会

1年生

ダンシング玉入れ

BGMを流し、子どもたちが曲に合わせてダンス。曲が止まったらダンスをやめて、玉入れを開始します。玉を入れるかごを持っているのは6年生です。

玉は、乾燥させたトウモロコシの実を四角い端切れで包んで絞り、縫い合わせて作りました。

2年生

フラフープ走

2人一組で1つのフラフープに入り、走ります。スタート地点まで戻ったら次の組にフラフープを渡します。

5年生

棒引き／騎馬戦

グラウンドの真ん中に複数の長い棒を置き、それを両チームが自分の陣地に引っぱり合います。騎馬戦は4人一組になって戦い、ハチマキを奪い合いました。

6年生

リレー／組体操

クラス全員が行うリレー。足の速い子が多く接戦となり、盛り上がりました。組体操では、先生に生徒の近くにいてもらい、安全を見守ってもらいました。

開催を終えて

運動会開催を通して、子どもたちの体力面・情操面の変化が見られました。練習を始めた頃は、例えばオレンジを運ぶリレー種目でオレンジを落とした子に対して、失敗を責めるような声かけをする子もいましたが、チームワークが次第にできていくと応援の声へと変わりました。仲間と関わる機会が増え、自尊心や責任感、連帯感が芽生え、ルールを守ることの大切さが学べたと思います。教員たちにも変化がありました。体育の教科で子どもの責任感や連帯感が養えるということ、その必要性がわかってもらえたと思います。運動会開催の取り組みはやがて市内のほかの小学校へも広がったと聞いています。

先輩隊員の

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

コンセプトに魅力を感じ 任期中から 積極的にアプローチ

今月の先輩

岡本光貴さん Koki Okamoto

カンボジア／体育／2015年度9次隊、
カンボジア／体育／2017年度2次隊・東京都出身

就職先：

株式会社 biima

事業概要：スクール事業（総合キッズスポーツスクール「biima sports(ビーマ・スポーツ）」）、保育事業（21世紀型教育の総合スポーツ保育園「biima school(ビーマ・スクール）」）のほか、コンサルティング事業（bbc）、ITクリエイティブ事業

岡本光貴さんの略歴：

1994年	神奈川県生まれ
2016年 2月	日本体育大学在学中に、海外協力隊の短期ボランティアでカンボジアに赴任
2017年 10月	大学卒業後、青年海外協力隊員としてカンボジアに赴任
2019年 10月	帰国
2020年 4月	株式会社biima入社。スポーツ事業部所属

JICA海外協力隊ウェブサイト

「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊の経験者のみとなります。 ※対応可能な日は希望進路の分野によって異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

日本体育大学で、体育の教員免許取得を目指していた岡本光貴さんは、3年生のとき、大学とJICAが連携する短期ボランティアに体育隊員として参加。カンボジアで約1カ月、国立体育教員養成校の学生に体育の指導をした。そして、現場により深く関わりたいと、卒業後、新卒で長期派遣として再び同校に赴任した。

のちに就職する株式会社biimaを知ったのは、大学卒業間近のこと。同社がスポーツ指導者を募集しているが、興味はないかと友人から声をかけられたのがきっかけだった。すでに協力隊への参加が決まっていたのでそのときは断ったが、会社のコンセプトに魅力を感じたという。

「特に興味を持ったのが、運動能力の育成とあわせて、コミュニケーションや課題解決能力などを高める非認知能力開発プログラムです。言葉がわからないカンボジアで活動した経験から、社会ではこうしたスキルこそが重要だと感じたからです」

任期が終わったらこの会社で働きたいと強く思った岡本さんは、一時帰国の際には、同社でアルバイトをしている大学の後輩に会社の様子を聞いたり、後輩を通じて事業部長と会う機会を設けたりと、積極的にアプローチをした。それが功を奏して、任地からのオンラインによる説明会や面談が実現し、採用となった。

今、岡本さんが考えているのは、子どもの教育に、親をいかに巻き込むかということ。

「教育の質は家庭環境によって大きく変わります。学校の勉強も習い事も、子どもの一番近くにいるのは親なので、親が家庭において上手に子どもを導けるように、環境を整えられないか。将来的には、そのための場づくりをすることが目標です。それはカフェなのか、体育館なのか、あるいはまちづくりなのか、答えはまだ見えていませんが、環境とコンテンツの両軸で実現したいと思っています」

1 協力隊時代　2017年10月～

カンボジア各地から体育教師を集め研修会を実施

配属先は、カンボジアで唯一、体育教員の養成を目的とした国立体育教員養成校です。主な活動内容は、授業種目の指導法の紹介や実技指導の支援を通して、教員の指導力アップ、学生への直接的な指導を行うことでした。活動2年目の2018年11月頃から、養成校を2年制学校から4年制大学に移行するプロジェクトが海外のNGO主導でスタートしたため、NGOとも連携しながらの活動となりました。2年間の活動を通じて、体育の授業を楽しく展開していくという視点を現場の教員に共有してほしいという思いが強くなり、帰国直前に、隊員仲間と教員のための3日間の研修会を企画・実施し、カンボジア中から約20人の教員が参加してくれました。

2 会社説明会に参加（オンライン） 2019年3月

任期中に会社説明会があることを知りました。どうしても参加したいと思い、当時はまだオンラインでのセミナーは一般的ではありませんでしたが、事業部長にお願いし、オンラインでカンボジアから参加させてもらいました。

3 書類提出　2019年3月

提出書類 ▶履歴書・エントリーシート

エントリーシートの志望動機には、「均一的な学校教育だけではどうしても取り残されてしまう子どもたちに、民間企業の立場からアプローチし、家庭の学習環境を整えるサポートをしたい」と書いたように記憶しています。

4 面接（オンライン）　2019年4～5月

計3回、オンラインでの面談を行いました。1回目はスポーツ事業部のチームリーダー、2回目は事業部長、3回目は社長と。すべて1対1の面談でした。協力隊の活動内容や、その経験を会社でどう生かしたいのかなどを話しましたが、あまり深くは聞かれなかったという印象です。会社としてはオンライン面接が初めてだったこともあり、その時点では、合否判定を保留にしたいと伝えられました。

5 帰国～業務委託　2019年10月～

実際に私が現場で働く様子を見たいということで、帰国1週間後から1カ月、業務委託としてコーチ業務や会員とのやりとりなどを行いました。

2019年11月内定、2020年4月入社

現在の仕事

「biima sports」は、現在30都道府県に150拠点を展開していますが、多くは地元の企業とのフランチャイズ契約によるものです。私の業務の一つは、その企業のフォローアップとして、コーチの育成、レッスン動画のチェックなどを行うことです。また、全国47都道府県に「biima sports」のコンテンツを提供できるよう、新規開拓のための営業活動も行っています。個人的な夢ですが、新型コロナウイルス感染症の流行が収束したら、海外への事業展開もしてみたいと思っています。

biima sports の活動として、学校の先生向けの研修会を開催

後輩へメッセージ

私は協力隊に参加する前から、帰国後に就職したいと思った会社があり、任期中から計画的に就職活動を行っていました。そのため、帰国後に就職活動を考えている後輩の皆さんにはあまり参考にならないかもしれません。ただ、隊員時代も帰国後も、子どもの教育に関わりたいという軸は一貫していました。自分の軸を持ち、そこに当てはまる会社選びをしていけば、やりたいこと、成し遂げたいことにつながる仕事が見つかると思います。

Text＝油科真弓　写真提供＝岡本光貴さん

派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

▶グローバル教育プロモーター

是永美夏子さん（旧姓：守屋）　Mikako Korenaga
エジプト／青少年活動／ 2003年度3次隊・神奈川県出身

❶協力隊時代。エジプトのストリート・チルドレン保護施設の子どもたちと一緒に
❷協力隊時代。ストリート・チルドレン保護施設で時間割の説明をしているところ
❸ユネスコ時代。モバイルスクールプロジェクトではNGOと日本の助成事業を是永さんがつなぎ、移動式の学校の開発などを行った
❹現在は日本の小・中・高校に出向いてJICA出前講座を行う活動も

世界の子どもたちのためにできることを一緒に考えていく

是永さんが貧困問題に課題意識を持ったのは中学生の頃。「不条理な状況に置かれている子どもたちを支援したい。その使命が自分にあるのではないか」と考え、これが自身のキャリアの軸になった。学生時代に開発経済学を学ぶと共にベトナムでストリート・チルドレンへの支援に携わり、銀行に入行して社会人経験を2年積んだのち、2003年に協力隊に応募する。

当時、エジプトでは貧困や家庭の事情から多くの子どもたちが路上生活を余儀なくされる過酷な状況に置かれており、派遣先のNGOはカイロ郊外に入所・通所支援施設を創設し、3歳から15歳までの子どもたちを保護する支援をしていた。

NGOからの要請は子どもたちへのアクティビティ提供であったが、詳細までは決まっていなかった。そこで、是永さんはニーズを探り、これから社会で生きていく一人ひとりに基礎教育が欠かせないと考え、教育プログラムの開発と提供を提案する。施設長の賛同を得て、すぐに是永さんはカリキュラムの開発に取り組み、NGOのソーシャルワーカーと役割を分担し、アラビア語の読み書き、計算、音楽、美術、運動などの学びを子どもたちに提供していった。学習の経験がなかったことから、当初は子どもたちに戸惑いもあったというが、是永さんがコーディネート役を務め、子どもたちの反応を見ながら調整していくことで、一人ひとりが学び、楽しみ、成長していく取り組みが根づいていった。

任期を終えたのち、是永さんはイギリスのサセックス大学の大学院に進学して国際教育学を研究する。「貧困と教育の課題を根本から解決するにはどうすればよいか。現場での実践を研究することで解決策を見いだしたい」と、ストリート・チルドレンのための教育カリキュラムの研究に取り組み、1年で国際教育学の修士号を取得した。

そして、この直後に課題解決に向けた実践に取り組むこととなる。当時、ストリート・チルドレンや働くことを余儀なくされている子どもたちに教育の機会を提供していく学校事業「フレンドリースクール」がエジプトで始まっていた。フレンドリースクールはユネスコ（※）とエジプト教育省、現地NGOの三者が協働して推進するプロジェクトだ。是永さんは国連ボランティアとして採用され、ユネスコのカイロ事務所にプロジェクト担当として派遣された。

カイロの都市部ではNGO内に設置された教室での事業が動きだしていた。是永さんのミッションは遠方に住んでいて既設の学校に来られない子どもたちに教育を届けること――その手段として「モバイルスクール（動く学校）」を創り出すことを一任された。多分野の人たちと協働し、財源確保、バスをベースにした教室の開発、子どもたちが働く工場などへの働きかけを行った。こうして始まったモバイルスクールプロジェクトで子どもたちは学び、小学校修了資格を得られるようになった。

多くの人たちと協働してモバイルスクールを形にし、子どもたちを社会に包摂するミッションを果たせたことに是永さんは喜びを感じている。

「国連ボランティアを目指すのであれば、語学力に加え、関連する機関に出向いていき、自分が何に興味を持ち、何ができるのか、自分をアピールすることが大事だと思います」。是永さんは次の目標を早期に決め、勉強や準備をして志望先にアプローチしていき、活動の場を切り開いていった。

国連ボランティアを2年間、その後にユネスコと個人で契約を結んで1年間コンサルタントを務めたのち、是永さんは日本に帰国し、小学校の教員を3年間務めるなどし、現在は自身の役割をグローバル教育プロモーターと位置づけ、国際理解教育の推進に取り組んでいる。

「国際協力×教育が私のキャリアの軸であり、この根幹にはユネスコ憲章があります。相互理解、国際理解教育を継続していくことで、より平和な社会を創ることに貢献したいと考えています」

学校や地域に出向き、協力隊や国連ボランティアでの経験を伝え、世界の子どもたちのために私たちに何ができるのか、子どもや大人と一緒に考える取り組みを進めている。

Text＝久保田裕之　写真提供＝是永美夏子さん

※ユネスコ…国際連合教育科学文化機関（UNESCO）

是永さんの歩み

大学卒業後に銀行で法人営業に携わる。入行2年目に退行。2003年に協力隊に応募し、エジプトに派遣される。

プロジェクトファイナンスなどで銀行員として国際開発に携わる道も考えましたが、すぐにでも現地で国際協力に携わりたいと思い、協力隊に応募しました。

▼

協力隊活動ののち、2006年にイギリスのサセックス大学の大学院に進学。

国際機関で働くためには専門性が必要と考え、修士号を1年で取得できるイギリスに絞り、国際開発学が充実しているサセックス大学に進学しました。留学に向けた勉強や準備は協力隊の活動中も続けていました。

▼

2007年、国連ボランティアに採用される。

この公募は私が大学院で研究していたプロジェクトでした。応募時に、協力隊での活動、アラビア語を話せること、大学院での研究、赴任先のプロジェクトを調査したことなどをアピールしました。

▼

ユネスコのカイロ事務所で、国連ボランティアとして2年間、その後にコンサルタント契約を個人で結び1年間、プロジェクトに携わる（計3年間）。

問題意識を持ってミッションに取り組み、自ら企画し、いろんな人を巻き込み、多分野の人たちと協力してプロジェクトを進めていく協力隊での現場経験が役立ちました。

▼

2013年から神奈川県川崎市と東京都の小学校の教員に。

30代になり、自分がどう生きるか、誰にどう貢献していくか考え、日本の子どもたちに還元できる方法はないかと考え、帰国後に教員を目指しました。

▼

2016年からグローバル教育プロモーターとして活動。

国際理解教育は学校だけではなく地域でもできると思います。継続していくことで、より平和な社会を創ることに貢献したいです。

アジアの学生を中心にした人材育成事業も行う。
写真はパキスタン・カラチ大学の学生に向けた海外育英奨学金授与式

待ってます、あなたを！
各界からのエール
From 公益財団法人
三菱UFJ国際財団

帰国隊員／青年支援プロジェクトより。左：巣内秀太郎さん（ケニア／プログラムオフィサー／2011年度4次隊）の「エイズに影響を受ける子どもたちに！未来のためのカウンセリング」、右:國谷昇平さん（タイ／作業療法士／2015年度1次隊）の「ポータラーム郡における寝たきりゼロ事業」の様子

帰国後も国際協力に関わりたい その熱意を応援し続けます

「この国のために、自己資金を出してでも、どうしてもやりたいんです」――そんな申請書を読むたびに、グッと心をつかまれます。

私たち公益財団法人三菱ＵＦＪ国際財団は、協力隊を育てる会と協力し、「帰国隊員／青年支援プロジェクト」を行っています。帰国後も途上国への協力活動や、国際協力のための調査研究を希望するＪＩＣＡ海外協力隊ＯＶに対して、上限50万円を助成する支援事業です。当財団の前身である三菱銀行国際財団が１９８７年から開始し、現在までに３８０名近い協力隊ＯＶを支援してきました。

このプロジェクトの申請書に迫力を感じるものが多いのは、協力隊ＯＶの方々が、途上国で暮らし、そこで生きる人々と共に活動し、その経験から見つけた課題を解決したい、そうした思いが込められているからにほかならないと思います。先行きが不透明な時代、ご自身の生活や将来に対する悩みや不安も、当然あるでしょう。それでも、淡々と、「そんなことは大変ではありません。自分はこれがしたいのです」と、国際協力の道に突き進む方々の志の高さ、熱意に心が動かされます。

私同様、積極的に途上国の支援に関わる方々の姿に、勇気をもらう、といった人は少なくないと思います。協力隊ＯＶの方々には、ライフワークとして続けていただきたいし、ご自身もハッピーになっていただきたい。私どもも皆さんの熱意と思いをこれからもサポートしていきたい。そう、強く思います。

渡邉邦弘さん
公益財団法人三菱ＵＦＪ国際財団専務理事
わたなべくにひろ ● 宮城県出身。１９８５年上智大学卒業後、株式会社三菱銀行（現株式会社三菱ＵＦＪ銀行）入行。国内（東京、青森、長野）、海外（オランダ、オーストリア）などでの勤務を経て、２０１８年より現職。キャリアコンサルタント。

任地の思い出を聞きました。

あの日、地球の、あの場所で。

断食明けの大祭 インドネシアの満腹レバラン

人口の約9割、実は世界一ムスリムが多いといわれるインドネシア。私は南スラウェシ州タカラール県の特に敬虔なムスリムが多く暮らす地域でホームステイをしていました。

ムスリムには年に1度、約1カ月間、夜明けから日の入りまで断食する「ラマダン」の習慣があります。ラマダン中の食事は、日が昇る前の朝3時ごろと日が暮れてからの1日2回。ステイ先のおばあちゃんは、つばすらも吐き捨て一滴の水分も体に入れないようにしていました。私も挑戦しましたが、3日で挫折。部屋やトイレなどでこっそり水を飲んでいました。

そんなムスリムの楽しみといえば、やっぱり断食明けのお祭りです。レバランと呼ばれ、日本のお正月のように、みんな各地から一斉に帰省して家族や親戚と一緒に過ごします。

ホームステイ先にも次々と知らない人が帰ってきて寝食を共にしました。親類の家を回る習慣もあり、私もステイ先の家族に連れられて親戚宅を回りました。その数なんと10軒以上。1軒目の訪問で「たくさん食べてね」と出された料理がおいしくて、出されるままに完食。ところが、次の訪問先でも同じものが出され、また次も同様の料理が……。

米をココナッツミルクと塩で炊いた「クトゥパ」と呼ばれる料理は、スープに浸して食べる定番の一品。「出されたものは食べる」をモットーにしてきた私も、さすがにもう食べ切れませんでした。満腹レバラン！

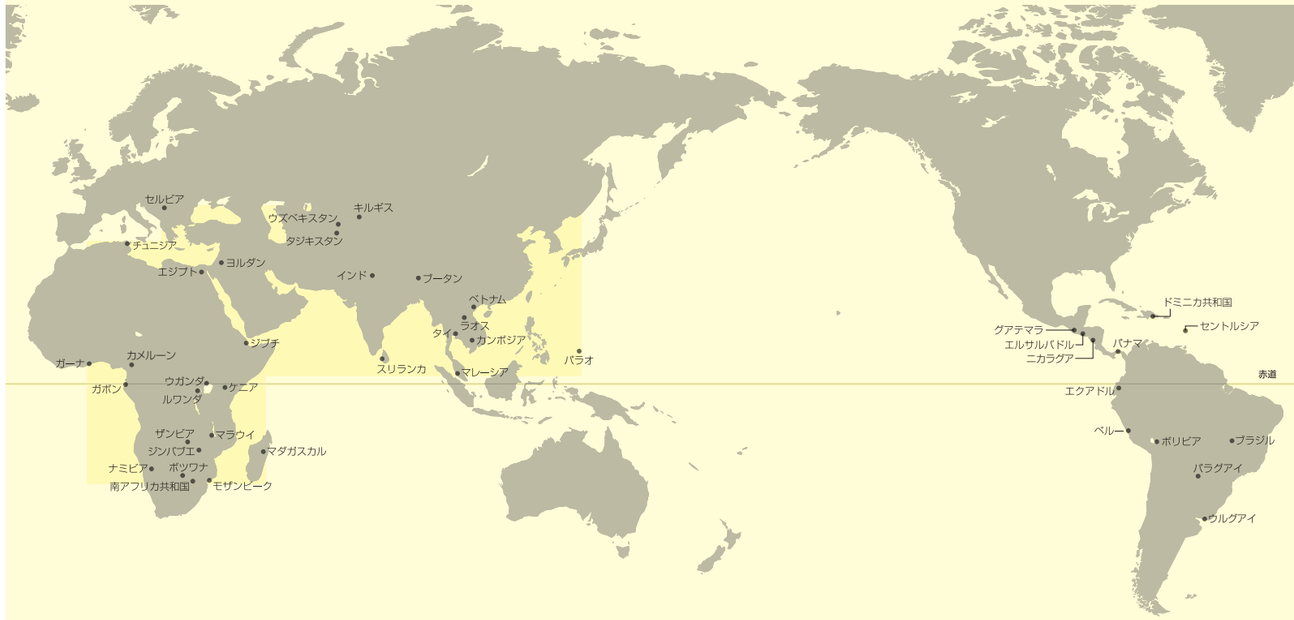
熊倉百合子（くまくらゆりこ）さん
インドネシア／青少年活動／２００８年度1次隊・栃木県出身
栃木県国際協力推進員

Illustration＝牧野良幸　Text＝新海美保

現在の派遣国数
43カ国

JICA海外協力隊派遣現況

（2022年4月末現在）



（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	23	
ガーナ	13	
ガボン	11	2
カメルーン	13	
ケニア	28	
ザンビア	1	
ジブチ	1	
ジンバブエ	6	
ナミビア	9	
ボツワナ	1	
マダガスカル	20	
マラウイ	18	
南アフリカ共和国	3	1
モザンビーク	7	2
ルワンダ	22	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	2	
ウズベキスタン	3	
カンボジア	20	
キルギス	2	
スリランカ	3	
タイ	10	1
タジキスタン		1
ブータン	6	3
ベトナム	16	
マレーシア	7	4
ラオス	12	4

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
パラオ	5	3

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	11	
チュニジア	7	
ヨルダン	8	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ウルグアイ		1		
エクアドル	1			
エルサルバドル	3			
グアテマラ	3			
セントルシア	2			
ドミニカ共和国	5		4	
ニカラグア	2	1		
パナマ	1	1		
パラグアイ	6	1		
ブラジル			5	
ペルー	1	1		
ボリビア	5			

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	323 （137／186）	27 （18／9）	9 （2／7）	0	359 （157／202）
累計 （男性／女性）	46,123 （24,452／21,671）	6,582 （5,317／1,265）	1,551 （599／952）	547 （252／295）	54,803 （30,620／24,183）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

「青年海外協力隊の日を祝う会」で広尾の慰霊碑に献花

JICAボランティア事業が発足した4月20日は「青年海外協力隊の日」です。毎年この日に（公社）青年海外協力協会(JOCA)が「青年海外協力隊の日を祝う会」を開催し、東京・広尾にあるJICA海外協力隊員の慰霊碑に献花を行っています。新型コロナウイルスの感染が収束しないため、昨年に続き今年も4月20日にJOCA代表者のみによる献花が行われました。

派遣国で志半ばに亡くなったJICA海外協力隊員のための慰霊碑（東京・広尾）

NEWS

2年半ぶりにラオス首相への表敬訪問

ラオスで活動中のJICA海外協力隊員16名がラオスのパンカム首相を表敬訪問しました。在ラオス日本大使館の公使やJICAラオス事務所長も臨席するなか、隊員代表が活動の様子やラオスでの生活などについて、写真も交えながら報告を行いました。首相への表敬は2002年以降、ほぼ毎年機会を頂いてきましたが、新型コロナウイルスの感染拡大による一時帰国もあり、19年以来約2年半ぶりの表敬訪問になりました。パンカム首相は就任後初の表敬訪問であったこともあり、各隊員の報告に熱心に耳を傾け、コメントされるなど、JICA海外協力隊事業への理解を深めていただけた様子でした。

NEWS

「協力隊まつり2022 ～私もみんなもつながっている～」を開催

青年海外協力隊発足の日に合わせ、JICA海外協力隊を一般の方々に身近に感じていただき、国際協力に興味を持ってもらうことを目的に毎年4月に開催される「協力隊まつり」（主催：協力隊まつり実行委員会、共催：JICA）。今年は、「私もみんなもつながっている」をテーマに、4月23日（土）、24日（日）の両日、JICA市ヶ谷会場（地球ひろば）とJICA関西をリアル会場とし、オンラインでも同時に行うハイブリッド形式で開催されました。

イベントでは、協力隊OVが関わる各種団体の活動紹介やワークショップのほか、『国際協力キャリアガイド』元・編集長の田中信行氏（セネガル／コミュニティ開発／ 2013年度2次隊）によるキャリアパスセミナー、パラリンピックを通して共生社会を考えるパラスポーツセミナー、JICA海外協力隊の映画「クロスロード」（2015年公開）の特別上映などが行われました。JICA青年海外協力隊事務局も参加し、JICA海外協力隊への応募説明会や相談会を催しました。

東京・市ヶ谷会場での応募説明会の様子

JOCAによるJICA海外協力隊
リアル&オンライン相談会も行われた

クロスロード［ 2022年6月号 ］

第58巻第5号　通巻677号
発行日　2022（令和4）年6月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株)　校正：佐藤智也

『クロスロード』は、
JICA海外協力隊のウェブサイト
でも公開しています。

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

編集後記

JICA事務局：特集の後輩隊員へのメッセージは、多くの隊員に伝わるメッセージなのではと思います。隊員時代の当時の自分にも届けたい！信頼して助けを求めること、価値観に固執しないこと、大変な状況でも楽しむこと、どれも協力隊に必要ですね。（脇田雄気）

クロスロード編集室：１月の読者アンケートにご協力くださった皆様、ありがとうございました。「コロナ禍の先輩隊員の記事を読みたい」の声にお応えし、特集を組みました。帰国したばかりのOVの話はリアリティにあふれ、エネルギーをもらいました。（千川美奈子）

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。　●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

隊員めし

現地で作った日本食、日本で作る現地めし

ケニア

西山礼奈（にしやまれいな）さん（旧姓 小林）

ケニア／栄養士／2018年度1次隊・福岡県出身

小学校で栄養教諭として子どもたちの給食管理や食育に関わる。現職教員特別参加制度を利用して協力隊に参加し、ケニアの保健福祉センターでの栄養指導や小学校での発育測定、栄養教育などを行う。2020年3月に帰国。4月より復職し、現在中学校の栄養教諭。

現地で作った
日本食

「お好み焼き」

任地の同僚や友人は、食に対して保守的で、見慣れない料理は口にしない印象を受けました。抵抗なく口にしてくれそうな日本食を考えたときに、ケニアの主食であるチャパティに見た目が似ていて、小麦粉やキャベツといったケニアの家庭でよく使われる材料でできるお好み焼きを思いつきました。ケニア料理の味つけのほとんどは塩のみなので、任地の調理師学校の料理教室では、生地にだしは入れずに塩を加え、ソースやトッピングなどもつけずに、「ジャパニーズチャパティ」と紹介して作り、食べてもらいました。

●材料（小4枚分）

- 卵 …… 1個
- 塩 …… 小さじ1程度
- （または顆粒のだしの素 … 小さじ3）
- 水 …… 120mL
- キャッサバ粉（またはキャッサバのすりおろし） …… 15g
- 薄力粉 …… 85g
- キャベツ …… 140g（大1/6個程度）
- サラダ油 …… 適量
- ソース …… お好みで
- ※ケニアでソースを使うなら、「チョマソース」という調味料で代用できます
- マヨネーズ …… お好みで
- （あれば）かつお節や青のり… お好みで

●レシピ

❶ボウルに、卵、塩かだしの素、水を入れ混ぜる
❷キャッサバ粉（またはキャッサバのすりおろし）を加え、混ぜる
❸薄力粉を少しずつ加え、ダマがなくなるまでよく混ぜる
❹粗みじん切りにしたキャベツを加え、さっくりと混ぜ合わせる
❺フライパンに油を引き、中火で生地を両面焼く
❻お好みでソース、マヨネーズ、かつお節、青のりなどを加え、仕上げる

<西山さんからのアドバイス>
キャッサバ粉は、「ウジ」とよばれるケニアのおかゆの材料の一つとして使われています。生地にキャッサバ粉を加えると、山芋を入れたお好み焼きのようなほどよくもっちりとした食感になります。顆粒のだしの素は、手に入るようであれば入れると日本人の口に合うと思います。

<編集室で再現した感想>
難易度 ★★☆☆☆
達成感 ★★★★★

キャッサバ粉が手に入らず、ハラル食材店ですりおろしの冷凍品を購入して使用しました。もっちりした食感になりました。肉なしのお好み焼きはおいしくないと予想していたのですが、味つけが塩だけでもおいしく感じましたし、生地にだしの素を入れたり、トッピングにかつお節や青のり、マヨネーズとソースをかけた場合は、お好み焼きと遜色ない味わいでした。

日本で作る
現地めし

「チャパティ」

赴任後初めて、食べて教わったケニア料理です。チャパティは、ケニアの国民的な食べ物で、朝食や間食としてチャイと一緒にそのまま食べたり、豆のシチューやビーフシチューなどのケニア料理の主食として食べたりされています。大家のお母さんがよく作ってくれていた「ポジョ（グリーングラムという豆を煮込んだシチュー）」と合わせて食べるのが好きでした。材料もシンプルで日本でも簡単に作れるので、ぜひ試してみてください。

●材料（4枚分）

- 薄力粉 …… 100g
- 強力粉 …… 100g
- 塩 …… 小さじ1/2
- ぬるま湯 …… 100mL
- サラダ油 …… 大さじ2
- 打ち粉 …… 適量
- サラダ油（焼く用） …… 適量

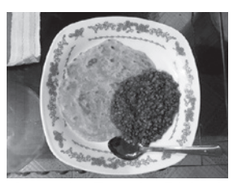
●レシピ

❶ボウルに、薄力粉、強力粉、塩を入れ混ぜる
❷ぬるま湯を少しずつ加えながらこねる
❸生地が耳たぶ程度の軟らかさになりまとまったら、サラダ油を加え、さらにこねる
❹生地を丸め、ラップをかけ、30分ほどおく
❺生地を4等分にし、丸める
❻打ち粉をした台の上に生地をおき、めんぼうで延ばして形を整える
❼フライパンに油を引き、弱～中火で生地を両面焼く

<西山さんからのアドバイス>
❶小麦粉は薄力粉と強力粉を混ぜて使用していますが、なければ薄力粉のみでも構いません。
❷ぬるま湯の量は目安量です。様子を見ながら少しずつ加え、残したり追加したり調整してください。
★アレンジレシピ：軽食や朝食などでそのまま食べる場合は、お好みで生地に（❶のタイミングで）砂糖やシナモンを加えたり、❼で焼くときのサラダ油をバターに替えるのもお薦めです。

<編集室で再現した感想>
難易度 ★★★☆☆
達成感 ★★★★☆

❻で生地をめんぼうで延ばすとき、きれいな円に延ばしていくのが意外と難しいと感じました。いろいろな副菜に合ううえ、アレンジレシピでちょっとしたおやつが作れるのもいいと思いました。ナッツやドライフルーツを入れて焼いても良さそうです。



任地でのある日の夕食。好きだったチャパティとポジョ（豆のシチュー）の組み合わせ

学校給食を食べる子どもたち。ケニアでは給食は少ないが、この学校では日本のNPOの支援で給食が支給されていた

調理師学校でお好み焼きの料理教室を開催。作ったお好み焼きをおそるおそる試食

ケニアでは炭火を使い、フライパンでチャパティを焼いた

Text・再現料理＝ホシカワミナコ（本誌）　Photo（再現料理）＝千川 修　レシピ・写真提供＝西山礼奈さん

クロスロード 2022年6月号
2022年6月1日発行（毎月1回1日発行）第58巻第5号 通巻677号
編集・発行 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

自社アトリエの前で職人たちと川口さん（写真前列左から3番目）。「職人とのコミュニケーションを密に取ることで、納期の遅れなどもほぼなく仕事が進んでいます」

＼ウチのこだわり／

OB・OGショップ
―海外編―

アフリカで愛される色鮮やかな布「パーニュ」で仕立てた浴衣

川口莉穂さんは2014年に青年海外協力隊員として西アフリカの小国・ベナン共和国に渡った。現地では「パーニュ」と呼ばれるアフリカ独自の布を伝統服や洋服に仕立てるのが一般的だ。しかし、地方の町の仕立屋の多くは開店休業状態。技術を持ちながらも仕事がなく、ミシンのある店先で果物を売る職人も珍しくなかった。

「職人のなかに、たまたま近所に住むシングルマザーがいて、その親子のためにできることはないかと思ったのが起業のきっかけです」（川口さん）

隊員として青少年活動に取り組む傍ら、川口さんはクラウドファンディングで資金を集め、現地の職人と協働して浴衣制作を始めた。そして任期終了後に本格的にビジネス化した。浴衣を選んだ理由は、直線縫いが基本なので浴衣制作の初心者でも仕上げやすかったからだ。「生活が厳しい職人を優先して雇用を創出したいのですが、クオリティも軽視できません。糸の縫い目が曲がっていると日本では売れないと何度も伝えました。ほかの日本製品を見せてクオリティの高さを実感してもらったりもしました」。やりとりを重ね、今では浴衣のほかにエプロン、布小物など商品数も増えた。

コロナ禍以前までは1年の約半分はベナンに滞在していた川口さんだが、今は信頼できるビジネスパートナーに現地の仕事を任せているという。「隊員時代に、現地の人の本音を引き出せるほど、現地の人と仲良くなれました。だからこそ、シェリーココの事業が生まれたのだと思います」。

陽気で誠実な人柄のベナンの職人たちとは基本的に仕事が進めやすいという川口さん。願いは、ベナンの人々と関わり続けることだ。「ベナンを好きになって始めたアフリカ布の事業だからこそ、いずれはベナンの子どもたちの教育にも関わっていきたいです」。

日本の消費者向けに布の色柄は厳選している。100～200種類のサンプルのなかから、商品化に至るのは5、6種類くらいだという

SHOP DATA

シェリーココ
経営者：川口莉穂さん
（ベナン／青少年活動／2013年度4次隊・神奈川県出身）
ウェブショップ
https://www.cheriecoco.jp

Text＝村重真紀　写真提供＝シェリーココ

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722
VEGETABLE OIL INK
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。